

感じた通りを申すと、どうも小説(好い意味でいふのですが)らしい感じが乏しいのです。ことに最初の赤子を殺す氣狂の如きは滑稽な感じが起る丈です。是は氣狂になる人の心的状態が毫もないので同情が起らないからではありませんか。氣狂になるには氣狂になる徑路がありませう。それが讀者の腑に落ちないでは主人公に氣の毒だとか可哀さうだとかいふ氣は起し得ません。たゞ残酷な人だといふ事を強ひつける積ではないでせう。又夫なら藝術品として何の價値もないでせう。もしさういふ意味で書いたのでないとするなら、氣狂に至る經過其物即ち他から見た事實もしくは事實の推移其物の敘述、換言すればある連續した原因結果を具像的に示し得る眞の發揮でなければなりません。即ち氣狂のやる行爲が一々奇抜だとか刺戟に富んでゐるとか悉く陳腐と平凡を離れた意味で讀者の眼を驚ろかし同時に啓發しなければなりません。不幸にして赤子殺しにはそれを見出し得ません。なぜとなれば彼はたゞ妻をいぢめてゐる丈ぢやありませんか。一言にさう云へばそれで盡せるのです。他奇なしです。同じムードを繰り返してゐるのです。さうして最後に突然子を殺すのです。子を殺すのは奇抜です。成程氣狂らしいです。其所丈が新しい刺戟です。然しそれが君の目的にかなひませうか。

次の方は赤ん坊殺しより餘程いゝと思ひます。多少の發展があるからです。順序がともかくも迎れるからです。従つて當人のサイコロジの方から見ても外面的に敘述される事實の連鎖からいつてもいゝやうです。(然し赤ん坊を殺すのと比べて見てまだ増しだといふ位なものです)。僕の考では是とても藝術品にはなつてゐないと思ひます。「癲狂院の中より」といふ見出しで中央公論か新小説の二段欄の頁へ出るべき性質のものぢやなからうかと思ひます。

御返事が遅くなつて濟みません原稿は一先づ御返し致します。

先達て中央公論に出た蕃人の事を書いたものは面白う御座いました。

私は自分で變な小説をかいて君のものをけなして悪いと思ひます、然し自分の事は棚へ上げて只批評眼文を御求めにより働らかせました丈です。どうぞあしからず 以上

八月二十四日

夏目金之助

中村 翁 様

一九三一

八月二十四日 木 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より 千葉縣一ノ宮町一ノ宮館芥川龍之介、

久米正雄へ

此手紙をもう一本君等に上げます。君等の手紙があまりに潑刺としてゐるので、無精の僕ももう一度君等に向つて何か云ひたくなつたのです。云はゞ君等の若々しい青春の氣が、老人の僕を若返らせたのです。

今日は木曜です。然し午後(今三時半)には誰も來ません。例の瀧田樗陰君は木曜日を安息日と自稱して必ず金太郎に似た顔を僕の書齋にあらはすのですが、その先生も今日は缺席するといつてわざ／＼斷つて來ました。そこで相變らず蟬の聲の中で他から頼まれた原稿を讀んだり手紙を書いたりしてゐます。昨日作つた詩に手も入れて見ました。「癲狂院の中より」といふ色々な狂人を書き分けたものだといふ原稿を讀ませられました。中々思ひ付きを書く人があるものです。



芥川君の俳句は月並ぢやありません。もつとも久米君のやうな立體俳句を作る人から見たら何うか知りませんが、我々十八世紀派はあれで結構だと思ひます。其代り畫は久米君の方がうまいですね。久米君の繪のうまいには驚ろいた。あの三枚のうちの一枚(夕陽の景?)は大變うまい。成程あれなら三宅恒方さんの繪をくさす筈です。くさしても構はないから、僕にいつか書いて呉れませんか。(本當にいふのです)。同時に君がたは東洋の繪(ことに支那の畫)に興味を有つてゐないやうだが、どうも不思議ですね。そちらの方面へも少し色眼を使つて御覽になつたら如何ですか、其所には又そこで滿更でないのもちよい／＼ありますよ、僕が保證して上げます。

僕は此間福田半香(華山の弟子)といふ人の三幅對を如何はしい古道具屋で見大變旨いと思つて、爺さんに價を訊いたら五百圓だと答へたので、大いに立腹しました。是は繪に五百圓の價がないといふのではありません。爺なるものが僕に手の出せないやうな價を云つて、忠實に半香を鑑賞し得る僕を吹き飛ばしたからであります。僕は仕方なしに高いなああと云つて、店を出てしまひましたが、其時心のうちでそんならおれにも覺悟があると云ひました。其覺悟といふのを一寸披露します。笑つちやいけません。おれにおれの好きな畫を買はせないなら、已を得ない。おれ自身で其好き「な」畫と同程度のものをかいてそれを掛けて置く。と斯ういふのです。それが實現された日にはあの達磨などは眼裏の一翳です。到底芥川君のラルブルなどに追ひ付かれる譯のものではないのですから、御用心なさい。

君方は能く本を読むから感心です。しかもそれを輕蔑し得るために讀むんだから偉い。(ひやかすのぢやありません、賞めてるんです)。僕思ふに日露戦争で軍人が露西亞に勝つた以上、文人も何時迄恐露病に罹つてうん／＼蒼い顔をしてゐるべき次第のものぢやない。僕は此氣餒をもう餘程前から持ち廻つてゐるが、君等を惱ませるのは今回を以て嚆矢とするんだから、一遍文は黙つて聞いてお置きなさい。

本を讀んで面白いのがあつたら教へて下さい。さうして後で僕に借して呉れ玉へ。僕は近頃めちやめちやで昔し讀んだ本さへ忘れてゐる。此間芥川君がダヌンチオのフレイム オフ ライフの話をして傑作だと云つた時、僕はそんな本は知らないと申し上げたが其後何時も坐つてゐる机の後ろにある本箱を一寸振り返つて見たら、其所に其本がちやんとあるので驚ろいちまひました。たしかに讀んだに相違ないのだが何が書いてあるかもうすっかり忘れてしまつた。出して見たら或は鉛筆で評が書いてあるかも知れないが面倒だから其儘にしてゐます。

きのふ雑誌を見たらシヨウの書いた新しいドラマの事が出てゐました。是はとても倫敦で興行出來ない性質のものださうです。グレゴリー夫人の勢力ですら、ダブリンの劇場で跳ね付けたといふ猛烈のもので、無論私の刊行物で數奇者の手に渡つてゐる丈なのです。兵隊がV.C.を貰つて色々なを並べ立て、景氣よく應募兵を煽動してあるく所などが諷してゐるのです。シヨウといふ男は一寸いたづらものですな。

一寸筆を休めて是から何を書かうかと考へて見たが、のべつに書けばいくらでも書けさうですが、書いた所で自慢にもならないから、此所いらで切り上げます。まだ何か云ひ残した事があるやうだけれども。

あゝさうだ。／＼。芥川君の作物の事だ。大變神經を惱ませてゐるやうに久米君も自分も書い



て来たが、それは受け合ひます。君の作物はちゃんと手腕がきまつてゐるのです。決してある程度以下には書かうとしても書けないからです。久米君の方は好いものを書く代りに時としては、どつかり落ちないとも限らないやうに思へますが、君の方はそんな譯のあり得ない作風ですから大丈夫です。此豫言が適中するかしないかはもう一週間すると分ります。適中したら僕に禮をお云ひなさい。外れたら僕があやまります。

牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。僕のやうな老猾なものでも、只今牛と馬とつがつて孕める事ある相の子位な程度のもので

あせつては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか興へて呉れません。うん／＼死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵らへてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て來ます。さうして吾々を惱ませます。牛は超然として押し行行くのです。何を押すかと聞くなり申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。

是から湯に入ります。

八月二十四日

夏目金之助

芥川龍之介様

久米正雄様

君方が避暑中もう手紙を上げないかも知れません。君方も返事の事は氣にしないで構ひま

せん。

一九三二

九月一日 金 牛込區早稲田南町七番地より 千葉縣一ノ宮町一ノ宮館芥川龍之介、久米正雄へ

今日は木曜です。いつもなら君等が晩に來る所だけれども近頃は遠くにゐるから會ふ事も出來ない。今朝の原稿は珍らしく九時頃済んだので、今閑である。そこで昨日新思潮を讀んだ感想でも二人の所へ書いて上げようかと思つて筆を取り出しました。是は口で云へないから紙の上で御目にかけるのです。

今度の號のは松岡君のも菊池君のも面白い。さうして書き方だか様子だか何方にも似通つた所がある。或は其價値が同程度にあるので、しか思はせるのかも知れない。兎に角纏つた小品です。それから可い思付を見付けてそれを物にしたものであります。

思ひ付といふと、芥川君のにも久米君のにも前二氏と同様のポイントがあります。さうして前の二君のが「眞」であるのに對して君方が兩方共一種の倫理觀であるのも面白い。さうして其倫理觀は何方もいゝ心持のするものです。

是から其不満の方を述べます。芥川君の方では、石炭庫へ入る所を後から抱きとめる時の光景が物足りない。それを解剖的な筆致で補つてあるが、その解剖的な説明が、僕にはひし／＼と逼らない。無理とも下手とも思はないが、現實感が書いてある通りの所まで伴つて行かれない。然しあそこが第一大切な所である事は作者に解つてゐるから、あゝ骨を折つてあるに違ないとする



と、(讀者が君の思ふ所迄引張られて行けないといふ點に於て)、君は多少無理な努力を必要上遣つた、若くは前後の關係上遣らせられた事になりはしませんか。僕は君の意見を聴くのです、何うですか。それから最後の「落ち」又は落所はあゝで面白い又新しい、さうして一篇に響くには違ないが、如何せん、照應する雙方の側が、文句として又は意味として貧弱過ぎる。と云ふのは expressive であり乍ら力が足りないといふのです。副長に對スル倫理的批評の變化、それが骨子であるのに、誤解の方も正解の方も(敘述が簡單な爲も累をなしてゐる)強調されてゐない、ピンと頭へ來ない。それが缺點ぢやないかと思ひます。

此所迄書いた所へ丁度かの〇〇〇先生が來ました。(先生はしきりに僕の作物の悪口を大つびらに云ふので恐縮します。然し僕はあの人を一向信用しません。だから啓發する譯にも行かず、又啓發を受ける譯にも行かないのです。先生は何だか原稿の周旋を頼むために僕の宅へ出入りをする人のやうに思はれてならないのです)。その後へ例の豪傑瀧田樗陰君がやつて來て、大きな皿をくれました。あの人には能く物を呉れるので時々又呉れるのかと疍違して、彼の小脇に抱へ込んでゐる包に眼を着ける事があります。其代り能く僕に字を書かせます。僕はあの人を「ボロツカイ」又は「あくもの食ひ」と稱してゐます。此あくもの食ひは大きな玉版箋をひろげて屏風にするから大字を書けと注文するので。僕は手習をする積だから何枚でも書きます。其代り近頃は利巧になつたから、書いた奴をあとからどん／＼消しにします。あくもの食ひは此方で放つて置くと何でも持つてちまひます。晩には豊隆、白川、岡田、エリセフ、諸君のお相手を致しました。エリセフ君はペテルブルグ大學で僕の「門」を教へてゐるのだから、是には本式の恐縮を表

します。其上僕の略傳を知らせろといふのです。何でも「門」を教へる前に、僕の日本文壇に於る立場、作風、etc. といふ様な講義をしたといふのだから驚天します。みんなの歸つたのは十一時過ですから、君等に上る手紙は其儘にして今九月一日の十一時少し前から再び筆を取り出したのです。

偕久米君は高等學校生活のスケッチを書く目的でゐるとか何處かに出ておましたが、材料さへあれば甚だ好い思ひ付です。どうぞお遣り下さい。今度の艶書も見ました。Point は面白い、敘述もうまい、行と行の間に氣の利いた文句の使ひ分などがひよい／＼ありますが、是は御當人自覺の事だから別に御注意する必要もありません、但し<sup>原</sup>あの淡いうちにもう少し何かあつて欲しい氣がします。艶書を見られた人の特色(見る方の心理及び其轉換はあの通りで好いから)がもつと出ると充分だと思ひます。あれはあゝ云ふ人だと云ふ事文分ります。然しあれ丈分つたのでは聊か喰ひ足りません。同じ平面でも好いからもつと深く切り下げられるか、或は他の斷面に移つて彼の性格上に變化を與へるとか何とかもう少し工夫が出来るやうに考へられます。「競漕」はあれ以上行けないのです。又あれ以上行く必要がないのです。

最後に芥川君の書いた「創作」に就いて云ひます。實は僕はあれをごく無責任に讀みました。芥川君の妙な所に氣の付く(アナトールフランスの様な、インテレクチュアルな)點があれにも出てゐます。然しあれはごく冷酷に批評すると割愛しても差支ないものでせう。或は割愛した方が好いと云ひ直した方が適切かも知れません。

次に此間君方から貰つた手紙は面白かつた。又愉快であつた。に就いて、其所に僕の眼に映つ



たつた可くないと思ふ所を参考に云ひませう。一、久米君の中に「私は馬鹿です」といふ句があります。あれは手紙を受取つた方には通じない言葉です。従つて意味があつさり取れないのです。其所に厭味が出やしないかと思ひます。それから芥川君の中に、自分のやうなものから手紙を貰ふのは御迷惑かも知れないがといふ句がありました。あれも不可せん。正當な感じをあんまり云ひ過ぎたものでせう。False modestyに陥りやすい言葉使ひと考へます。僕なら斯う書きます。「なんぼ先生だつて、僕から手紙を貰つて迷惑だとも思ふまいから又書きます」——以上は氣が付いたから云ひます。僕がそれを苦にしてゐるといふ意味とは違ひます。それから極めて微細な點だから黙つてゐて然るべき事なのですが、つい書いてしまつたのです。

あなた方は句も作り繪もかき、歌も作る。甚だ賑やかでよろしい。此間の端書にある句は中々うまい、歌も上手だ。僕は俳句といふものに熱心が足りないので時々義務的に作ると、十八世紀以上には出られません。時々午後七律を一首位づゝ作ります。自分では中々面白い、さうして随分得意です。出來た時は嬉しいです。高青邱が詩作をする時の自分の心理状態を描寫した長い詩があります。知つてゐますか。少し誇張はありますがよく藝術家の心持をあらはしてゐます。つまりうれいのですね。最後に久米君に忠告します。何うぞあの眞四角な怒つたやうな字はよして下さい。

是でお仕舞にします。以上

九月一日

芥川龍之介様

夏目金之助

久米正雄様

一九三三

九月二日 土 牛込區早稻田南町七番地より 本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎へ 使ひ持歸  
拜復此間は失禮致しました紙澤山にありがたう厚く御禮を申ます只今詩作中長い返事を書く能はず是にて御免 頓首

九月二日

瀧田様

夏目金之助

一九三四

九月二日 土 午後十時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より 千葉縣一ノ宮町一ノ宮館芥川龍之介へ  
啓只今「芋粥」を読みました君が心配してゐる事を知つてゐる故一寸感想を書いてあげます。あれは何時よりも骨を折り過ぎました。細敍絮説に過ぎました。然し其所に君の偉い所も現はれてゐます。だから細敍が悪いのではない。細敍するに適當な所を捕へてゐない點文がくゞしくなるのです。too labouredといふ弊に陥るのですな。うんと氣張り過ぎるからあゝなるのです。物語り類は(西洋のものでも)シムプルなナイーヴな點に面白味が伴ひます。惜い事に君はそこを塗り潰してベタ塗りに蒔繪を施しました。是は悪い結果になります。然し、芋粥の命令が下つたあとは非常に出來がよろしい。立派なものです。然して御手際からいふと首尾一貫してゐる



のだから文句をつければ前半の内容があれ文の努力に價しないといふ事に歸着しなければなりません。新思潮へ書く積りでやつたら全體の出來榮もつと見事になつたらうと思ひます。然し是は悪くいふ側からです。技巧は前後を通じて立派なものです誰に對したつて耻しい事はありません。段々晴の場所へ書きなれると硬くなる氣分が薄らいで餘所行はなくなりませう。さうしてどんな時にも日常茶飯でさつさと片付けて行かれます。その時始めて君の眞面目は躍然として思ふ存分紙上に出て來ます。何でも生涯の修業でせうけれどもことに場なれないといふ事は損です。

此批評は君の参考の爲めです。僕自身を標準にする譯ではありません。自分の事は棚へ上げて君のために(未來の)一言するのです。たゞ芋粥文を(前後を截斷して)批評するならもつと賞めま

す。今日カマスの干物が二人の名前できました。御好意を謝します。なにか欲しいものがあるなら送つて上げます。遠慮なく云つて御寄こしなさい。 頌首

九月二日夜

夏目金之助

芥川龍之介様

此巻紙と状袋は例の阿克モノグヒが呉れたものであります。彼は斯ういふ賄賂を時々刻々に使ひます。僕は彼の親切を喜ぶと共に氣味原をあるくします。同時に平氣で貰ひます。久米君へよろしく

秋立つや一卷の書の讀み残し

是はもつとうまい句だと思つて即興を書いてしまつたのであとから消す譯に行かなくなつたから其儘にして置きます。

一九三五

九月五日 火 牛込區早稻田南町七番地より 本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎へ 使ひ持歸

拜復御書拜見致し候本日御招きに可相成處御幼兒御不快のため御延引との事拜承致候實は小生も此間中より下痢の氣味にて御馳走は多少辟易の體に有之故丁度都合よろしく候八日に若し下痢がはげしうなれば其前一寸御通知可致候へどももし御序も有之候はゞ電話で都合を訊いて下されば猶更結構に候昨日消閑のため歸去來辭を書き候此間よりはよろしく候へども誤字一餘字二字程有之候此次御來駕の節可供貴覽候先は右迄 敬具

九月五日

夏目金之助

瀧田 樗陰様

病氣御大事の事と存候

一九三六

九月五日 火 午後十時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より 府下西大久保六十六番地戸川明三へ 拜復其後小生も存外の御無沙汰に打過ぎ何とも無申譯次第平に御海恕可被下候 拙作につき色色の御同情乍毎度有難存候當夏は例年より涼しき爲か暑さの苦痛もなくどうか斯うか書きつゞけ



居候 然るに昨今に至り仰の如く段々暑逆戻りの體多少辟易致居候平生から出無精の處へ此暑さと午前中の執筆にていづ方へも御無沙汰と申すと何だか不斷は義務を盡し居るやうにて吾ながら可笑しく相成候 兎も角も御挨拶旁御詫まで 草々頓首

九月五日

夏目金之助

戸川明三様

一九三七

九月六日 水 牛込區早稻田南町七番地より 本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎へ 使ひ持歸拜復アクモノグヒの手紙が芥川の處へ廻つて行つてしかも君の眼に觸れやうとは全く以て意外是では悪い事は出来ない筈ですないや何うも恐縮しました以來は慎みます何うぞ御海容を祈ります

八日には出来る丈勉強して出ますが行くものとして今から御肴の用意などをされると困ります御子さん御快方の由結構に存じます皿ありがたう兩方とも結構ですがことに四角な奴は雅味があります丸いのは高麗ですかいづれ明日拜顔の節萬々 敬具

九月六日

夏目金之助

瀧田 樗陰 様

一九三八

九月六日 水 午後十時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より 府下大森山王二千百三十八番地橋田丑

吾へ

肅啓御老母様御病氣の處御療養の甲斐もなく御逝去の由嘸かし御愁傷の事と存候乍略儀茲に書面を以て哀悼の微意を表し申候 敬具

九月七日

夏目金之助

橋田 丑 吾 様

一九三九

九月七日 木 牛込區早稻田南町七番地より 本郷區東京帝國大學醫科大學物理的治療室眞鍋嘉一郎へ拜啓此手紙持參の人は中村武羅夫と申し新潮といふ雑誌の編輯をする小生の知人に候中村君は右肩より右手の先へかけ倦怠鈍痛の感じを生じ今年三月頃より惱まされ居り今に全快の運びに至らず近頃君と小生との關係を聞き知り君に治療して頂きたいから紹介して貰ひたいと申され候故此手紙を認め候若し御手紙御披見の時が都合悪ければ何時でもよろしき故一寸御診察の上適當の治療法御授けの程願上候 頓首

九月七日

夏目金之助

眞鍋嘉一郎様



貴下

小生の驗尿も其内また御厄介になる事と存候御都合次第何時にても御送可致候故適當の期日  
參り候はゞ其旨御申聞相成度候目下少々下痢の氣味にて十日程相つゞき居候但し身體には何等  
の別條なき故其儘に致し置候

一九四〇

九月二十四日 日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より 仙臺市清水小路五十番地小池堅治へ  
拜復小生の作物につき過分の御褒辭を賜はり恐縮致候次に御申越の旨は委細承〔知〕致候近頃小  
生作物のうち二百十日を小樽のジョーズなる人が英譯致候本にするといふ故教育上の爲なら差支  
なしと申しやり候處何とかいふ雜誌へ載せる趣申來候。是は始めから英譯する價値なしと小生の  
斷はりたるものに候。次に八高の山田君が草枕を獨譯致されつゝある旨申來られ候譯後是も書物  
にする筈の處夫丈は御免蒙り候草枕は甚だ劣作なる故に候倫敦塔は草枕よりはまだ増しかも知れ  
ず候へども是亦つまらぬもの故止せるなら御止しになつた方がよからうかとも存候然し是非にと  
の御希望なれば已を得ざる譯故たつて御斷りは不仕候和獨對兩文を後から御出版になる事も教授  
用としてうち／＼に行はれるならば差支なく候へどもこんなものに夫程の御手数をかける上に出  
版迄させては不相濟儀ことに小生に於ては得意には無之儀御含み願上候獨譯は小生眼を通す丈の  
學力なく拜見致しても盲人のかき覗き故御手數に及ばず候。山田君の草枕は獨乙人に見てもらふ  
由に候

右迄 勿々

九月二十四日

小池 堅治 様

一九四一

夏目金之助

九月二十五日 月

午後零時—一時

牛込區早稻田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社

内山本松之助へ

拜啓昨日御送り致しました明暗百三十回の最後の二頁(十一頁?)一寸訂正の必要有之候故乍御  
面倒御返送願上候

猶申添候先日は明暗原稿坂崎君を通して御却送御手數奉謝候然るところあれには十數回のぬけ  
た回数ある由原稿をもらつたものより申來候故御序の節どうぞ御送り願ひ上候

用事迄 頓首

九月二十五日

山本松之助 様

一九四二

夏目金之助

九月二十五日 月 午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より 神戸市平野町祥福寺鬼村元成へ  
祥福寺へ御歸りの由承知來月富澤さんと一所に東京へ御出の由是も承知 昨日妻に譯を話した



ら都合出来るといひました。もつと住み易い場所があれば近所へ探して置いて上げます。其節は無論私の家へ御逗留なさる代りですから物質上何等の心配は要りません。私はまだ毎日午前中は執筆してゐますので案内をして方々見せて上げる譯に行かないかも知れません。但し午後と夜中は自由ですから御話し相手は出来るでせう。夫から時間と病軀が許すなら一二度は何處かへ一所に行きませう。見たい所を考へて御置きなさい。

用意の都合があるから立つ前もう一返日と時間を報知なさい。東京驛から此所へくるには誰かに聽いて電車に乗つて、大久保新宿行の電車に乗り易へて牛込柳町の停留所で卸ろして御貰ひなさい 以上

九月二十五日

夏目金之助

鬼村 元成 様

一九四三

九月二十七日 水 午前零時―七時 牛込區早稻田南町七番地より 神戸市平野町祥福寺富澤敬道へ

拜復此間鬼村さんからも手紙が來ました故承知の旨を返事して置きました 變てこな宅ですがまあ都合丈はつける積です氣に入らなければ濟松寺の方へでも御出なさい 濟松寺は好い寺です私の家より住み心地が好いでせう然し禪寺にばかりゐて俗人の家を知らないのも經驗にならんかも知れないとも思ひますから此方の方が好いかも知れませんが其上寺は窮屈でせう。私のうちも窮屈でせうが窮屈さが違ふから我慢し易いといふ所もあります。もつと好い場所があつたら探

して置いて上げます。東京見物の御金が足りなければ少々位上げます。御坊さんはあんまり金がないでせう、私も金持ではありませんが貴方方に上げる小遣位はあります。たゞ今小説を書いてゐるので多く時間を潰して案内をして上る譯には行かんかも知れません 以上

九月二十六日

夏目金之助

富澤 敬道 様

愚堂和尚の掛物を下さる由有がたい仕合せです。東京へ來る時持つてきて下さい

一九四四

十月九日 月 午後一時―二時 牛込區早稻田南町七番地より 滿洲奉天南滿醫學堂太田正雄へ

拜復奉天へ御赴任の趣敬承滿洲は上海杯とは違ひ支那の本色は如何かと存候へども自ら本地とは異つた面白味可有之ことに大兄の様な東洋趣味もある人には随分愉快な收獲も有之ならんと存候繪や骨董は何んなものやら知らねど日本よりも手に入り易くはなきかとも存候精々滞在の機會を利用して面白味を御吸收時々は雑誌でそれを御發表の程願上候先は御挨拶迄 勿々敬具

十月九日

夏目金之助

太田 正雄 様

一九四五

十月十八日 水 午後一時―二時 牛込區早稻田南町七番地より 名古屋市東區德源僧堂祥福會下鬼村元



成へ

あなた方は夜中に名古屋を出るのですね。けれども東京へ十時三十五分に着けるから便利です。停車場へは出て行かないから獨りで宅迄来て下さい。荷物があるなら停車場ですぐ車を雇つて来るし、電車へ乗る程な小さな包みなら提げて電車へ乗るのです。電車は東京驛の前の大通りを向つて左へ走るのへ乗るのです。それで水道橋迄来て乗り易へます。其所から新宿行といふのへ乗つて牛込柳町といふ停留で下ります。そこから宅迄五六分です。

或は東京驛で下りるとすぐ前の通りを左へ行くと二重橋だの帝劇だの日比谷公園だのが見られるから荷物を驛へあづけてそれ丈見ても便利です。

猷禪さんの懸物に就いて御心配は恐れ入ります。そんなに骨を折つて頂くとこつちが恐縮するから好い加減でよろしう御座います。右迄 匆々

十月十八日

夏目金之助

鬼村元成様

あなたの名前はキムラでしたね。夫からげんジョウです。いつか教へて下さつたが忘れてしまつたから聞きます。始めて逢つて間違をいふとおかしいから訊くのです

一九四六

十月十八日 水 午後一時—二時

牛込區早稻田南町七番地より 神田區南神保町十六番地岩波茂雄へ

拜啓此間は書物を御届ありがたうあの漢籍を買つた家は二軒あるうちの君の方へ近いうちです

があすこに清詩別裁といふ唐本がありますそれをあの時買ふ積であつたがあんまり一どきで辟易したなりになつてゐるが一寸欲しい故買つて届けてもらひたいのです。價は三四圓位ぢやないかと思ひます、それは君の小僧が來た時に拂ふから小僧にさう云つて教へて置いて下さい。以上

十月十八日

夏目金

岩波様

一九四七

十月十八日 水 午後一時—二時

牛込區早稻田南町七番地より 府下青山原宿百七十番地ノ十四號森次

太郎へ

拜啓明月の大字わざ／＼御送り御手数萬謝拜借中の機を利用して雙幅とも座敷へ懸けて眺め居候

近頃の鑑賞眼少々生意氣に相成候其生意氣な所を是非聞いて頂きたいので此手紙を書きます。

あの字はいま一息といふ所で止まつてゐます。だから其所を標準に置いて嚴格にいふと大半といふよりまづ悉く落第です。然し私はあれを見て輕蔑するものではありません、嗚呼惜いと思ふのです。今一息だがなと云ふのです。あの字は小供じみたうちに洒落氣があります。器用が崇つてゐます。さうして其器用が天巧に達して居りません。正岡が今日迄生きてゐたら多分あの程度の字を書くだらうと思ひます。正岡の器用はどうしても抜けますまいと考へられるのです。あれよりも私のもらつた六十の時の詩の方がどの位良いか分りません、夫から半折二行の春風



云々の七言絶句の方がはるかに結構です。  
良寛はあれに比べる「と」數等旨い、旨いといふより高いのでせうか、寂嚴といふ人のはまだ見  
ませんから何とも申上かねます。

是丈の氣燄をもち應へてゐると腹の毒ですから一寸排泄致しました。臭い事です 以上

十月十八日

圓 月 様

一九四八

十月二十日 金 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より 名古屋市東區徳源僧堂祥福會下鬼村元

成へ

拜復 指を切つたさうですね飛んだ事です。然しあの手紙が書ける位なら大した事ではありま  
すまい折角樂にして東京見物をしやうといふ矢先だから我慢して御出でなさい。宅の眞前に醫師  
があります其所で毎日洗つてもらふ事が出來ます。うちで頼んで上げます 以上

十月二十日

夏目金之助

鬼村元成様

一九四九

十月二十五日 水 牛込區早稻田南町七番地より 京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助へ

拜啓 此手紙持參の僧二人は神戸祥福寺僧堂に修業する禪僧に御座候此度機會を得て東上所々  
見物の處是非社の輪轉機を一見致し度由につき若し御差支なくば運轉の模様一寸でも傍觀御許可  
被下度邪魔にならぬ範圍にてよろしく御座候

十月二十五日

夏目金之助

山本松之助様

一九五〇

十月二十八日 土 牛込區早稻田南町七番地より 下谷區中根岸町三十一番地中村鉦太郎へ

木浦正君持參

拜啓其後御無沙汰失敬

却説今般越後の木浦正君是非一度貴君に御面會の榮を得たき趣につき御紹介致候につき御閑も  
有之候はゞ御引見被下度候木浦君は好事家にてことに越後の事とて良寛の愛好者にて今度も面白  
き切張帖持參被致候今度出京の用向の一部分は大兄に面談御所藏の古法帖等拜見致す爲の由に候  
へば其邊の御便宜も出來得る限り御與へ被下度願上候 先は右用事迄 頓首

十月二十八日

夏目金之助

中村不折様

梧前



一九五一

十月三十一日 火 午後六時―七時 牛込區早稻田南町七番地より 神奈川縣鶴沼七千二百番地和辻哲郎へ  
拜啓段々寒くなります御變りもありませんか 私も無事です 松茸をありがたう あれは何處  
から来たのですか中々方々から松茸をくれます 此間は電話である人の奥さんが松茸があり過ぎ  
て困るから少し貰つてくれと頼んで来ました 此松茸なるものは私の小供の時分は滅多に口にす  
る事の出来ない珍味でした それが今日になると昔を回顧する度に妙な心持を誘ふやうに松茸が  
出てくるのだから不思議千萬です 先は御禮迄 勿々頓首

十月三十一日

夏目金之助

和辻哲郎様

一九五二

十一月三日 金 牛込區早稻田南町七番地より 本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎へ 使ひ持歸  
拜復昨日は失禮畫帖早速出來御好意奉謝候芥川君は昨夜參貴意申傳候處正月は既に新潮と文章  
世界の兩方へ受合ひたるため他へは手をのばす餘地無之由に候若したつての御所望なれば直接の  
御交渉も可然と存候へども今回は是にて御斷念來春を期し好きもの御書かせに相成候へば中央公  
論の爲にも本人の爲にもよろしかるべきかと存候御禮旁御返事の序に愚考乍蛇足つけ加へ申候先  
は右まで 敬具

十一月三日

夏目金之助

瀧田 樗陰 様

座右

一九五三

十一月四日 土 午後二時―三時 牛込區早稻田南町七番地より 神戸市平野町祥福寺富澤敬道へ  
今朝御手紙が來ました 御滞留中は何にも愛想がなくて御氣の毒でした小説を書いてゐるので  
私が自身案内して上る事が出來ず残念でした夫でも御満足の趣委細承はりまして愉快です カラ  
カサも届きました 畫帖は頼んだらすぐ直して呉れましたから此手紙と一所に送ります。來年も  
ひまがあつたら遊びに入らつしやい私はあなた方の御宿をして色々禪の話をして聞いて大變参考にな  
りました是は篤く御禮を申上りたいと思つてゐる所であります。鬼村さんへどうぞよろしく。御兩  
君とも御勉強を祈ります 以上

十一月四日

夏目金之助

富澤 敬道 様

一九五四

十一月四日 土 午後二時―三時 牛込區早稻田南町七番地より 赤坂區青山南町六丁目百八番地小宮豊  
隆へ



拜啓アグラフィエーナ御送難有存候今日拜見致候所が小生には殆んど何等の感興なきものなるを  
事を發見し大いに驚ろいてゐる次第に候 君の面白がる點此次御面語の節委細承はり候へば參考  
にも可成かと存居候。小生の見る所ではもしあれが日本人の手になつたとすれば何人も一顧も拂  
はない味のなき作物として葬られてしまふだ「ら」うと考へ申候 隨分長いわりに一頁として小生  
の心を潑刺ならしめたる所なきには閉口仕候 先は右御禮旁御返事迄餘拜眉の上萬々 頓首

十一月四日

夏目金之助

小宮豊隆様

一九五五

十一月四日 土

使ひ持參 牛込區早稻田南町七番地より 小石川區關口水道町六十六番地近藤春吉へ

拜啓過般拜借致し其儘になつてゐました東京市史稿市街篇第一第二及び地圖二葉御返却致しま  
す。永々留めて置いて濟みませんもつと早く御返し致す積で居ました所今に讀まう讀まうといふ  
氣があつたものですからつい今日迄おくれ「た」のです其癖遂に讀もせず御返し致すのです。御  
笑ひ下さい 以上

十一月四日

夏目金之助

近藤春吉様

一九五六

十一月六日 月

午後一時—二時

牛込區早稻田南町七番地より

赤坂區青山南町六丁目百八番地小宮豊

隆へ

啓 御手紙拜見 屹度何か云つてくるだらうと思つたら云つて來た。實をいふと僕は君が何に  
も書かずに澄ましてゐる方を希望してゐたのです。何故？それは大抵解るでせう。もつと人間に  
餘裕を作るのです。無暗に反應を呈しないのです。さうして樂になるのです。他に返事を書かな  
いのを賞める譯ではないが無暗に文壇で云ひ合ひをする癖でも取れて行くかと思ふからです。  
然し手紙の中味を見た時は少々感服しました。君は屹度あの作物を辯護して來るだらうと考へ  
てゐた所大いにそんな私いや我をすてゝゐるからまあ是丈でも君は少々人間として進歩したので  
せう

却説あの小説にはちつとも私はありません。僕の無私といふ意味は六づかしいのでも何でもあ  
りません。たゞ態度に無理がないのです。だから好い小説はみんな無私です。完璧に私があつた  
ら大變です。自家撲滅です。だから無私といふ字に拘泥する必要は全くないのです。

然らば無私な態度のあの作が何故つまらない？好い作物は無私だが、無私だからといふて詰ら  
ないものはつまらないのは當然な譯ですから、僕はあの無私を認めても矢張り詰らないといふの  
です。

其説明はよく分析を経ないと明瞭には云へないけれども厭味も街氣もなんにも無いうちに味と  
いふものがすりつぶされてしまつてゐるのです。仙臺鮪は美味といふが大味ならまだしも何んな  
味もないのです。まあ湯を吞ませられるのです。しかも湯を三合も四合も一度に吞まされるので



す。あすこにあるものは人間と人間との接觸から出る味でなくつて、人生の経路の輪廓です。線丈で其線がそれ自身に潑刺と運動しつゝ進行しないからあれは固定した人生の型を書いて其型なりに歸着點を示したものです。斯うしろあゝしろと注意を加へない説教のやうなものです。哲學として云へば女子供に云ひきかせるための哲學です（もつと六づかしい事がワカラナイから已を得ず）イソップ物語の長いやうなものです。男を順々に拵へて行く變化はあるが其一轉ごとが利かないから變化も應へて來ません。まだ云ふ事が残つてゐるやうだけれどもよく分らないから書けません。

要するにあれは態度の悪い作物ぢやないのです。缺點は外にあるのです。

此返事を書く主意は辯解しなくつてはゐられないからではありません。面倒だけれども書いた方が君の爲になると思つて書いたのです。決して私はありません。以上

十一月六日

夏目金之助

小宮豊隆様

一九五七

十一月十日 金

午後三時—四時

牛込區早稻田南町七番地より

神戸市平野町祥福寺鬼村元成へ

拜復先達の手紙は拜見難有う御座います大して御世話もしないであんな丁寧な御禮を云はれては痛み入ます然しそれが縁になつて修業大成の御發心に變化すれば私に取つて是程満足な事はありません。私は日本に一人の知識を拵へたやうなものです。富澤さんも略あなたと同様の事を云

つて來ました。坊さん方の奇特な心掛は感心なものです。どうぞ今の決定の志を翻へさずに御奮勵を祈ります。私は私相應に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積です。氣がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥ともに虚偽で充ち／＼てゐます。耻づかしい事です。此次御目にかゝる時にはもう少し偉い人間になつてゐたいと思ひます。あなたは二十二私は五十歳は二十七程違ひます。然し定力とか道力とかいふものは坐つてゐる丈にあなたの方が澤山あります。

子供にやる繪端書は何でも構ひません。兄は純一弟は伸六です。

富澤さんが薪折原をしてゐるといふ事を云つて來ましたから一寸一句御覽に入れます

まきを割るかはた祖を割るか秋の空

といふのです。禪坊さんは禪臭いのを嫌ひませう日常坐つたり提唱を聞いたりして禪といふ字が鼻についてゐるでせう。然し素人は又とかく實力もないのに禪とか何とか振り廻して見たくなるものです。何うも悪い癖ですね 呵々

十一月十日

夏目金之助

鬼村元成様

一九五八

十一月十五日 水

午後一時—二時

牛込區早稻田南町七番地より

神戸市平野町祥福寺富澤敬道へ

啓 饅頭を澤山ありがたう。みんなで食べました。いやまだ残つてゐます。是からみんなで平



げます。俳句を作りました。

饅頭に禮拜すれば晴れて秋

饅頭は食つたと雁に言傳よ

徳山の故事を思ひ出して

吾心點じ了りぬ正に秋

僧のくれし此饅頭の丸きかな

瓢箪はどうしました

瓢箪は鳴るか鳴らぬか秋の風

副司といふ役は會計をやるんですか面倒でせう。詩は拜見しました。作務の間に詩作するのは風流です。然しあなたの詩はまだ旨い所へ行つてゐませんね。昔の人の作例を讀んで深い感興が湧きさへすればもつと好い詩が出来る筈だと思ひますが何うですか。是は悪口ぢやありません。折角遣り出したものだからもつと上手になつて欲しいといふ心持です。

無孔の鐵槌とは何ですか 禪語ですか、たゞ上面の意味でも可いから此次序に教へて下さい。二三日前作つた私の詩を書き添へます

自笑壺中大夢人

雲竇縹緲忽忘神

三竿旭日紅桃峽

一丈珊瑚碧海春

鶴上晴空仙翮靜

風吹靈草藥根新

長生未向蓬萊去

不老只當養一眞

是もまだ改良の餘地があるやうですが専門家でないから好加減な程度であなたに見せる丈です。變な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志ざす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大變な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の専門家ですが矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから五十迄愚圖々々してゐた私よりどんなに幸福か知れませんが、又何んなに特勝原な心掛原か分りません。私は貴方方の奇特な心得を深く禮拜してゐます。あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊とい人達です。是も境遇から來るには相違ありませんが、私をもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へると實に自分の至らない所が情なくなりませぬ。以上

十一月十五日

富澤 敬道 様

一九五九

十一月十六日 木 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より 420 West 116th Street, New York

夏目金之助



成瀬正一へ「はがき」

御安着結構です。あなたの獨探の話(航海中の)は新思潮で讀みました。面白いです。通信もよみました。あなたはヒポドロームへ芝居を見る氣か何かで飛び込みましたね。芥川君は賣ツ子になりました。久米君もすぐ名が出るでせう。二人とも始終來ます。菊池君文は新聞記者で忙がしいので來ません。もう一人の連中 哲學者(越後の)も來ます。「明暗」は長くなる許で困ります。まだ書いてゐます。來年迄つゞくでせう。本になつたら讀んで下さい。コレラハもう下火です。文展ももう御仕舞になります。昨日から寒くなりました。右迄 草々

一九六〇

十一月十七日 金

午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より 神田區南神保町十六番地岩波茂雄へ

拜啓此手紙のうちに切抜きたる廣告の書物四卷乍御面倒御買取御届被下まじくや毎度御手数恐入候へども今日天氣あしく外出退儀故願上候 以上

十一月十七日

夏目金之助

岩波茂雄様

一九六一

十一月十九日 日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より 金澤市第四高等學校大谷正信へ

拜啓昨日山鳥が到着致しましたので何處から來たのかと思つたら大谷正信といふ札が付いてゐ

ました。何うも有難う御座います。私は貴方の事を忘れてゐるのに貴方は私の事を考へて下さるのみならず時々魚だの鳥だの御菓子だのを頂戴するのは勿体ない事です。尤も忘れるといつても記憶に消されてしまふ譯ではないのだから御容赦を願ひます。一寸御禮迄 草々

十一月十九日

夏目金之助

大谷正信様



『書簡集』補遺



八A (補遺一)

明治二十三年七月五日 土 牛込區喜久井町一番地より 松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規へ〔はがき  
正岡子規『筆まかせ』より〕

早速御注進

先生及第乃公及第山川落第沼落第米山未定 頓首敬白

七月五日夜

八B (補遺二)

明治二十三年七月九日 水 牛込區喜久井町一番地より 松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規へ〔はがき  
正岡子規『筆まかせ』より〕

不順之折柄御病體如何陳は昨日如例卒業式有之大兄卒業證書は小生當時御預上り申上候差し  
當り御不都合なくは九月に拜眉之上可差上候先は其爲め口上左様なら

二五〇A (補遺三)

明治三十八年四月七日 金 午前五時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込西片町十  
番地大塚保治へ〔繪はがき〕



猫の畫は中々うまい。あれは妻君の代作だらう。  
猫の顔や骨格や姿勢はうまいが。色がまづい。頭の周圍にある模様見た様なものも妙だな。  
僕も畫端書をかいて奥さんを驚ろかせやうと思ふがひまがないからやめ。  
僕は今大學の講義を作つて居る。いやでたまらない。學校を辭職したくなつた。學校の講義より猫でもかいて居る方がいゝ。

三五一A (補遺四)

明治三十九年二月二十三日 金 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區東京帝國大學坪井九馬三へ 「封筒表の宛名に「文科大學長坪井九馬三殿」とあり」

拜啓

昨日は小生英語學試驗委員辭退の件につき再應教授會の御意見を御代表にて御勧めに相成まして先づ一通り貴意のある所は分りました。

何度も御心配をかけて御迷惑の事と存じます。其節は卑見を充分申述べる暇もなく御授業時間切迫の爲め引き取り甚だ不意に存じます。右につき再び御面會の上思ふ通りを陳述致したいと存じま「す」が御多忙中却つて御迷惑と思ひますから書面にて今一應申上ります。

昨日の御話では教授會では小生の辭退の理由を至當と認められたさうであります。是は小生の深く教授會に對して謝する所であります。然しそれにも關らず強いて小生に委員たれと御依頼になるのは小生に取つて非常の光榮とは思ひますが此光榮たる少々自ら双肩に擔ふを恐れたく思ふ

のであります。御話の模様では教授中には適當の人物なき故英語に關係深き小生を推すやに理解致しましたが是は小生に取つてはいたみ入る御謙遜の御言葉と存じます。教授のうちには多年歐米に留學せられて普通の語學者よりも斯道にかけて秀でたる人々多しとは單に小生の思ふのみならず一般の公論であります。去ればこそ今回の試験委員中にも一名の教授が御加はりに相成つて試験を御監督に相成る事と存じます。只御監督に相成る所を一步御奮發下さつて答案を御覽下さるれば此問題は一も二もなく解決の出来る事と存じます。昨日事務室で試験の程度を示した書名一二を拜見致しました所ミルの論文やギボンの歴史杯があつた様に思ひます。ミル杯は哲學者がよむ方が小生杯よりも明かに分ります。ギボンも歴史家によませる方が私よりうまく讀ませう。かくの如く小生如き者が進んで委員となるよりも教授の方が銘々御試験になる方が尤も學生の實力が分り易い様に存ぜられます。教授會では教授中に適當な人がないとの仰せで無理にも小生をとの御命令ではありませうが小生の見る所では全く反對で却つて其専門の教授方が擔任せらるゝ方が好成績が出るに相違ないと思ひます。のみならず既に一名の西洋人が委員となつて實用的英語の方はそちらで間に合ひますから、どつちから云ふても小生の必要は認められませぬ。かう申すと何か無暗に頑固を主張する様で甚だ濟みませんが、私の方から教授會の御意見を伺ふと教授會の方が無理を云つて入らつしやる様に聞えます。實際出ないでも濟むものを無理に出して二百人の答案をしらべさせる杯は人が悪いじやありませんか。どうか御助け下さい。以上

二月二十三日

夏目金之助



坪井先生  
虎皮下

四九三A (補遺五)

明治三十九年十一月十六日 金 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 京都市浄土

寺町二番地松本文三郎へ〔はがき〕

京都文科大學記念繪葉書御贈拜受致候晩秋の京都は嘸か「し」と存候。あの繪葉書は高尚にて面白く候右御禮迄 草々

十一月十六日

五三九A (補遺六)

明治四十年一月十一日 金 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より 京都帝國大學

松本文三郎へ

今般は目出度御結婚の由新春の御祝儀をかね奉遙賀候 謹言

正月十一日

松本文三郎様

追白小生舊臘より表面の處へ轉居致候間左様御承知被下度候

夏目金之助

五七八A (補遺七)

明治四十年四月十三日 土 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より 京都帝國大學松本

文三郎へ

拜啓京都滞在中は尊來を辱ふせるのみならず銀閣の仙境に俗塵を振ひ落し候嘸かし御迷惑事と存候其後諸方に流轉昨十二日漸く歸庵一寸御暇乞に參堂可仕筈の處行李忽々不得其意聊か尺箋をそめて遙かに感謝の意を表し候餘は他日拜眉の節萬縷 艸々不悉

四月十三日

金之助

亡羊先生  
座下

乍筆末御令聞へよろしく御傳言願上候

六一七A (補遺八)

明治四十年七月十一日 木 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より 小石川區原町百二

十番地行徳俊則へ

拜啓例の件につき色々御世話に相成難有存候御問合せの人御兩名とも都合あしき由承知致候大兄にてよろしければとの御意見辱く存候もし御希望なら無論喜んで社の方へ紹介致すべくもし又迷惑ながら小生へ對する義理として當分引受けてやるとの御親切ならば左のみ急ぐ事にも有之間



敷大兄も御歸省其他にて御多忙と存候間別に其儀に及ばずと愚考致候右如何の御意見にや一寸手紙にてよろしく御洩らし願上候 以上

七月十日夜

夏目金之助

行徳俊則様

七九四A (補遺九)

明治四十一年六月二十二日 月 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より 京都帝國大學松本

文三郎へ

尊書拜讀舊臘御出京の節御約束申上候隨意講義の件につき改めての御依囑却つて恐縮致候たとひ短時間の講義にても御希望を満すを得ば小生の光榮と存居候へども何角多忙にて纏まりたる考も浮ばず従つていつ京都へ参り何の問題にてどの位の時間開講致す様の確たる御返事も致しがたく甚だ御氣の毒と存候。又社の方は萬一講義調へ了りたる時は其節一應許諾を得る心持につき夫迄は打棄置候考に御座候。隨意臨時の性質なれば強ひて故障を入るゝ必要も無之と存候。否當初御相談に乗り候節は幾分か大阪朝日の便宜にもなり候はんかの愚存も有之候位なれば其點は左したる心配も無之候へども只講義が出来るや否やに就ては頗る背約に終りはせぬかと心配致候。(表立ちたる講師任命杯の事は貴君も小生も新聞社も此際迷惑なるべければ先づ小生の分は臨時飛入位の御合位に留め置かれ公然時間割の發表は無論、名前も其間際迄は御出し被下間敷様願上候)

右甚不得要領にて御氣の毒ながら當座の御返事迄申上候曖昧の段は平に御堪辨に<sup>原</sup>あづかり度候 草々

六月二十三日<sup>原</sup>

金之助

松本學兄

八二六A (補遺一〇)

明治四十一年十月六日 火 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より 京都帝國大學松本文三郎へ  
拜啓先日御上京の節はわざ／＼御光來を蒙り候處執筆中にて失禮其後一寸御旅館へ参上の積の處是又多忙に妨げられて果さず萬事御容赦可被下候

諸講義の件につき御歸洛後御申聞の趣拜承致し可相成は都合相つき御間に合せ申度心得に有之候處段々考へて見ると夫から夫へと追はれる一方にて到底講義をプレペヤする時間杯は到底出來さうに無之たゞぼんやり京都に滞在する餘裕も出て來ない有様に候。先日の御話では舊い講義でもとの御注意も有之候へども此際古い講義文はどうあつても御免を蒙り度左ればとて新らしいのは今申したる次第實に汗顔の至に不堪然し不得已事情御憐察の上何時來る杯といふ事はあてにせず御出を願度候。あまり御氣の毒故御詫のしるし迄に一書を呈し候 草々不一

十月六日

金之助

松本兄



『續書簡集』索引







引索

北島英一	菊池謙二郎	鬼村元成	木下國恒	木村元成	神田十拳	川羽田隆賢	神谷久賢	鎌田敬四郎	金子雄太郎 <small>(齋園)</small>	金木九萬	勝又和三郎	加賀正太郎	奥田正一郎	岡田耕三	岡田正三	太田正雄
三三三	五二七	五二八	三三二	三五八	四九七	二二五	四九一	四六一	九	一九九	二六五	四六六	三四〇	四二二	四二二	一九一
三七六	三七六	五四五	三四七	三六六	七三	五四九	五二〇	一一	一一	二八一	四七二	四二六	三三〇	四二六	三三〇	三三〇
		五五〇	三七六	三七〇			五二一	一一二	一一二	二八七	四四二	四五七	四二六	四二六	四五七	六〇三
		五五〇	四一一	三七一			一四五									
		五八〇	四二二	三七三												
		六〇一	四四一	四〇一												
		六〇三	四四四	四四一												
		六〇六	四四五	四六五												
		六一二	四九六	四九六												
			五〇一	五〇一												

大塚保治	大谷正信 <small>(續石)</small>	大倉一郎	大石泰藏	江南武雄	江連重次	江口漢	浦瀬七太郎	梅垣きぬ	内田榮造	上田恭輔	上田敏	岩波茂雄	今井みとし
三三六	三四一	三六六	五七三	八一	一九五	五四〇	七五	四六六	五一	六一	一七二	四〇〇	四四四
	三四三	一七三	五七四				四〇一	連五六五	八九	四四三	四四三	四〇三	四四五
	三五一	二二七						五〇八	一一二	五二八	五二八	四〇八	四五〇
	三九二	二二三						五一九	二三五	五三五	五三五	四〇八	四八四
	四九八	二三七						五二七	二九七	五六五	五六五	五三六	五三六
	四九八	二五二						五五一	三〇一			五四七	五四七
	五二五	二六二							三〇二			五八一	五八一
	五六八	二七七							三二五			六〇四	六〇四
	六一六	三三二							三二六			六一六	六一六
		三三六							三三一				







引索

戸川明三(秋骨) 五二  
 東京朝日新聞社 四二七  
 讀書世界 三六二  
 徳田末雄(秋骨) 五〇四  
 徳田浩司(秋江) 五一三  
 富澤敬道(分外) 四四七

寺田寅彦 八  
 寺田寛 二八一  
 寺田寅彦 二五  
 寺田寛 四九〇  
 寺田寅彦 九一  
 寺田寛 一二七  
 寺田寅彦 一三五  
 寺田寛 一三七  
 寺田寅彦 一四六  
 寺田寛 一六四  
 寺田寅彦 一九四  
 寺田寛 四四三

津田龜次郎(香榎)

七九  
 二二三  
 二七六  
 三五五  
 四七〇  
 九二  
 二一五  
 二八〇  
 三六〇  
 四七六  
 一一八  
 二二五  
 二八二  
 三六三  
 四九四  
 一一〇  
 二二〇  
 二四八  
 二九〇  
 三三七  
 五三五  
 一九三  
 二六三  
 二九一  
 四〇四  
 五五一  
 一九八  
 二六四  
 二九八  
 四三八  
 五七〇  
 二〇一  
 二六六  
 三一一  
 四三六  
 四三九  
 四六〇  
 二〇五  
 二七三  
 三三三  
 三五三  
 二〇九

谷口盛

四四九

タ

田島金次郎 九八  
 田島道治 二八  
 田村俊 三九八  
 高濱清(虚子) 一一  
 高原操 九四  
 瀧田哲太郎(榜腰) 五四二  
 武定鈔(七(五)) 一一四

菅虎雄 八五  
 菅虎雄 一〇二  
 菅虎雄 一七五  
 菅虎雄 一七八  
 菅虎雄 一八〇  
 菅虎雄 一八三  
 菅虎雄 二二七  
 菅虎雄 四二五  
 菅虎雄 五一五  
 菅虎雄 五三一  
 杉浦重剛 二二四  
 杉浦重剛 五三八  
 杉浦重剛 五四七  
 杉浦重剛 一七八  
 杉浦重剛 一八〇  
 杉浦重剛 一八三  
 杉浦重剛 二二七  
 杉浦重剛 四二五  
 杉浦重剛 五一五  
 杉浦重剛 五三一  
 杉村廣太郎(楚人魁) 六九  
 杉村廣太郎(楚人魁) 七〇  
 杉村廣太郎(楚人魁) 七一  
 杉村廣太郎(楚人魁) 七二  
 杉村廣太郎(楚人魁) 一〇八  
 杉村廣太郎(楚人魁) 一四四  
 杉村廣太郎(楚人魁) 五二九  
 鈴木三重吉 一九  
 鈴木三重吉 二七  
 鈴木三重吉 四七  
 鈴木三重吉 六〇  
 鈴木三重吉 六一  
 鈴木三重吉 六三  
 鈴木三重吉 一一六  
 鈴木三重吉 二〇六  
 鈴木三重吉 二一〇  
 鈴木三重吉 二二〇  
 鈴木三重吉 四〇二

島崎友輔(柳場) 五三三  
 下山儀三郎 五六六  
 白神榮松 五二四  
 新神榮潮 四〇三  
 島崎友輔(柳場) 五三三  
 下山儀三郎 五六六  
 白神榮松 五二四  
 新神榮潮 四〇三  
 島崎友輔(柳場) 五三三  
 下山儀三郎 五六六  
 白神榮松 五二四  
 新神榮潮 四〇三







引索

宮本	宮正	皆川	水落	水義	三宅	三須	三木	松山	松本	松崎	松尾	松尾	前田	前川	眞鍋
本	正	川	上	義	宅	須	木	忠	本文	市	尾	尾	田	川	鍋
八六	二二	二二	二七八	九五	五八五	一一六	二九六	二五五	三三九	三〇三	五二一	三五九	五五八	二七	五六〇
		二八	三六二	三六二	一一九	五三三	五六一	二六九	四二二	四四			五六		五六〇
	一〇一		三六四	三六四		五三三	五六二	四六二	四二九	四七					五六二
	二〇二		四一七	四一七		五三三	五六九	五四三	五〇七	七四					五六九
	三四四		四八三	四八三		五三三	五七一	五六五	五二二	七八					五七一
	三四五					五三三	五九九		二〇〇	九〇					五九九
	四一四					五三三	九一		二〇〇	九一					
	五〇五					五三三	九三		二二二	九三					
	五一					五三三	九九		二九三	九九					
						五三三	一〇〇		三〇四	一〇〇					

文章	文章	藤森	福原	福井	平元	久内	樋口	東	林原	濱武	長谷川
章	俱	森	原	井	元	内	口		原	武	川
三九一	五六一	四四六	三五	四三一	一八六	四三	二二三	六	耕	元	萬
									三	次	次
											郎
											(如)
											是)
											閉
											一〇
											一一〇
											三二一
											四三三
											一四七
											一五五
											一五六
											一五七
											一五八
											一六〇
											一六四







解

說

『書簡集』補遺の部

渡邊新三郎(白水)	一九〇	二二九	二六六
渡邊傳右衛門(春透)	二四四	四一五	
渡邊	七七		
渡邊良法	四三五	四三九	
渡邊和太郎	四三三	四三一	一一九
			五三六
			五六〇
			二二七
			二四四
			二五五
			三三三
			三三三
			三三三
			三三三
			三三三

大塚保治	六二一		
行徳俊則	六二五		
坪井九馬三	六三二		
正岡常規(子規)	六三一	六二一	
松本文三郎(七巻)	六二四	六二四	六二五
			六二六
			六二七



### 『續書簡集』解説

明治四十三年八月の大患以後、大正五年十二月その爲め永久に起つ事が出来なくなるまで、漱石は殆んど毎年のやうに病床の人となつた。

修善寺大患の翌年、明治四十四年の八月には、漱石は、大阪朝日新聞社の爲に講演に行つた先の大阪で發病し、其所で三週間許り病院生活を送つてゐる。それはともかく平癒したが、然し漱石は歸京の翌日から、痔の療治の爲に、神田錦町の佐藤病院に通はなければならなかつた。是が癒り損なつたのか、それとも悪性すぎたのか、いつまでも癒る事がなく、明治四十四年の十二月末から明治四十五年（大正元年）の四月末まで、『彼岸過迄』を書いてゐる間にも、ずつと漱石は隔日に病院に通ふ事を餘儀なくされた。さうしてその年の九月の末には、根本的な治療を加へてもらふ爲に、一週間あまり、その病院に入院してしまふのである。漱石のこの入院中の経験が、最後の『明暗』に利用されてゐる事は、恐らく説明を要しない。

説解



もつとも明治四十五年（大正元年）には漱石は、幸ひ潰瘍には罹らなかつた。然し『彼岸過迄』が、その年の元日から四月二十九日まで新聞紙上に連載され、それがやがて終りに近づかうとする四月初めに、漱石は胃部に不安を感じ、「此二三週間又胃に酸が出て運動すると形勢」が不穏なので「成るべく静養の工夫」（四・二七・野上豊一郎宛）をしてゐるのだと言つてゐる。夏は夏で、或は「日に六回づゝ薬を飲みます三回にしたらどうも具合が悪くなつたので又逆戻りです何うも少し活動をすると宜しくありません」（八・一一・森成麟造宛）と言つたり、或は「日光で馬にのり中禪寺に登り夫からすぐ引き返し候節は馬の動搖のため胃に酸出で瓦斯を醸し多少の苦痛あり少々心配致候も一日安眠の後は平生と異なる所なく便通の如きは却つて東京に居るよりも快く候」（八・二六・夏目鏡宛）と言つたり、何か始終爆裂弾を懐にしてゐてもするやうな、物騒な氣配を絶えず感じてゐなければならなかつたが、ともかくこの一年は無事に過ぎた。然しその翌年の大正二年には、前年の十二月六日から紙上に掲載され出した『行人』執筆中の三月末に、一度やられ、暫く寝た上で、もうよからうと思つて『行人』の續きを一回分かいて社に送ると、再びどつとやられ、漱石は到頭五月の末まで寝込んでしまふのである。大正三年に漱石は、四月二十日から八月十一日に互つて、新聞紙上に『心』を連載する。然も漱石はその年の九月にまたまた病臥してゐる。是は潰瘍ではなく「ひどい胃カタル」（九・一六・笹川臨風宛）だつた

のださうであるが、然しそれでも漱石はその爲め、一月以上は床についてゐなければならなかつた。大正四年の春漱石は、『硝子戸の中』を書いてしまつたあと、次の小説を書き出すまでの暇を利用して、京都に遊びに行つた。さうして其所で、また寝込んでしまつた。もつとも是は大した事にはならなかつた。然し「姉危篤の電報来る。歸れば此方が危篤になるばかりだから仕方がないとおきらめると、漱石がその日の日記に書いてゐるほど、漱石の胃は痛んだのである。

漱石は四月十七日に京都から歸つて來た。歸つて來ると間もなく、六月三日から九月十四日に互つて、『道草』を新聞紙上に連載した。その『道草』が掲載になつて暫くすると、十二月の末から漱石はリューマティスの氣味で、腕の痛みに悩まされ始めた。漱石は机に憑る事が出來ず、「原稿などをかくのが非常の苦痛と努力」であつたのみならず、「夜中は痛みの爲安眠の出來ぬ始末」（五・一・一九・松山忠二郎宛）だつた。それで漱石は、一月二十八日に立つて、當時中村是公の行つてゐた湯河原に、二十日許り轉地する。是は後に糖尿病から來た痛みであるといふ事が分り、その方の療治にとりかかつてもらつた爲に、やがて根治した。さうして漱石はその年の五月二十六日から、新聞に『明暗』を掲載し始めるのである。それが十一月二十二日の發病によつて中斷され、十二月九日の死によつて永久に未完成のままに残された事は、周知の事實であるから、此所には贅しない。



多少の誇張を施して言へば、漱石は小説を書かない間は病氣で寝てゐたと言つて可いほど、絶えず病氣を、然も大抵は、それで命をとられる事は分かつてゐる、病氣をしてゐたのである。この事が漱石の考へ方の上に重大な影響を持つてゐた事は、言ふまでもない。

修善寺の大患が漱石にどんな事を體驗させたかは、漱石の『思ひ出す事など』が具に物語つてゐる。修善寺の大患は、漱石に死と面接させた。修善寺の大患は、漱石に老年を意識させ、老年の計を立てる事を覺悟させた。修善寺の大患は、漱石をして「人よりも空、語よりも黙」を愛せしめた。それは争ふべからざる事實である。然し一面から言へば、それによつてまだそれほどひどく痛振られては感じなかつた、漱石の旺盛な生活力は、假令思想的には漱石をして死を意識させ老を意識させたとしても、本能的には漱石をして、それからさほど深刻な影響を受けしめる事がなかつたのではないかと想像される。その上漱石は、病臥する事によつてあらゆる社會的義務から解放され、例へば小説を書いたり論文を書いたりしなければならぬといふやうな必要に迫られる事なしに、のびのびとした心持で幾日かを過して行く事が出来る境遇に置かれた爲に、反つてこの病氣を、自分に與へられた天資<sup>テラス</sup>だとして、享樂する傾向も持つてゐたのである。この事に就いても亦漱石は、その『思ひ出す事など』の中で述べてゐる。明治四十三年十月三十一日、

胃腸病院から夏目鏡に與へた手紙の中でも、漱石は「今のおれに一番藥になるのはからだの安靜、心の安靜である。必ずしも藥を飲んでゐる許や寐てゐる許が養生ぢやない。いやな事を聞かされたり、思ふ様に事が運ばなかつたり、不愉快な目に逢はせられたりするのは、藥の時間を間違へたり菓子をつめすんで食ふよりも悪いかも知れない。／＼／世の中は煩はしい事ばかりである。一寸首を出してもすぐ又首をちぢめたくなる。おれは金がないから病氣が癒りさへすれば厭でも煩はしい中にこせついで神経を傷めたり胃を傷めたりしなければならぬ。しばらく休息の出来るのは病氣中である。其病氣中にいら／＼する程いやな事はない。おれに取つて難有い大切な病氣だ。どうか樂にさせてくれ」と言つてゐる。

「おれに取つて難有い大切な病氣だ。」と言はなければならなかつた漱石の心持を考へて見ると、いかに漱石のそれまでの生活が、ある意味で精神的の重荷から重荷へと、絶えず喘ぎ續けなければならぬやうな生活であつたかが、痛ましく思ひ返される。それにしても、漱石が現在それほど病裡の清閑を樂しむ心持になつてゐるといふ事は、それほど漱石に死が——あれほど目近に迫つて來てゐた死が——ぐつと遠のいて、あれどもなきが如きものとして感じられてゐるといふ事を意味する筈である。事實また漱石は『思ひ出す事など』の中で、「俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かざるゝものは、たゞ寒くなる許であ



る。」と言つてゐる。漱石にとつては、自分の死にかけた事が恐ろしいよりも、寧ろ自分が癒りつつある事が嬉しかつたに違ひないのである。その方が漱石にとつて、遙にリアルな事だつたからである。十一月九日漱石は、ドイツにゐる寺田寅彦に宛てて、「僕は漸く軽快になつて此病院に歸臥してゐる。まづ當分は死にさうもない、喜んで呉れ玉へ。」と書いてゐる。翌明治四十四年三月七日、鹿兒島にゐる野間真綱に宛てて、「病氣の折はわざ／＼修善寺迄遠路を呼び出した様にあたり甚だ濟まぬ事と思ひ居候定めて休暇中のプランが破壊された事と存候御氣の毒に存候、然しあれで死ぬとしたら一寸でも逢つて置く方が御互に好かつたかも知れず候」と書いてゐるのも、寧ろその、死を遠くに見やつた喜びを表白してゐるものと解釋すべきであらうと思ふ。

然し是が、明治四十四年八月大阪での二度目の潰瘍となると、事情が少し違つて来る。幸ひ漱石は今度も平癒するにはしたが、然し去年と同性質の病氣に今年も亦罹つたといふ事實は、いくらそれが程なく平癒したからと言つて、漱石の心に特別に深刻に作用しないで措く筈がない。

明治四十四年十月十三日漱石は、修善寺で自分の傍についてくれた森成麟造に宛てて、「拜啓夫からは大無沙汰を致しました。先達は太患後一週年の時日を御忘れなくわざ／＼電報を賜はり候處實は御耻しいかなあの時は大坂で又々やつつけて入院してゐたのです。／＼どうも矢張り自

分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが、事情を御話しますとね、大阪の社から講演をたのまれて明石和歌山堺大阪の四ヶ所で喋舌つたのです、其堺あたりから少々腹が妙になつてこいつはといふ懸念も起りましたがもう一つだと思つて大阪を片付けて宿屋で寐てゐると何も食んに嘔吐を催ふしてとう／＼胃をたゞらして夫から血が出ましたので驚ろいて湯川胃腸病院へ這入つて三週間程加養して夫から東京へ歸つて又々須賀さんにかゝりました。すると何の因果か歸京の翌日から肛門周炎とかいふ下卑た病氣になつてとう／＼切開しました。夫が悪性なので三週間後の今日もまだ細い穴が塞がらない所があつて膿が出るのです。」と書いてゐる。「どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが」といひ、「何の因果か」といふ言葉の奥には、なんとも言へない淋しい響きがある。

それだけならまだよかつたのかも知れない。然しその年の十一月二十九日に、漱石は突如としてその第五女、一番末のひな子をなくしてしまふのである。漱石は日記の中に、その臨終から御通夜から納棺から御葬ひに至るまでの光景を、こまごまと書きつけ、それを後に『彼岸過迄』の中の『雨の降る日』に用ひてゐるが、その十二月三日の條には、「○生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして残つた子は入らない様に見える。／＼○表をあるいて小さい子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾



子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る。／○昨日不圖座敷にあつた炭取を見た。此炭取は自分が外國から歸つて世帯を持ちたてにせめて炭取丈でも思つて奇麗なのを買つて置いた。それはひな子の生れる五六年も前の事である。其炭取はまだどこも何ともなく存在してゐるのに、いくらでも代りのある炭取は依然としてあるのに、破壊してもすぐ償ふ事の出来る炭取はかうしてあるのに、かけ代のないひな子は死んで仕舞つた。どうして此炭取と代る事が出来なかつたのだらう。／○昨日は葬式今日「日」は骨上げ、明後日は納骨明日はもしするとすれば待夜である。多忙である。然し凡ての努力をした後で考へると凡ての努力が無益の努力である。死を生に變化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺恨な事はない。／○自分の胃にはひゞが入つた。自分の精神にもひゞが入つた様な気がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである。」と書いてある。かうして死の問題が、また人生の果敢なさが、更に切實に、更に犇犇と、漱石を取り巻き始めるのである。それでも漱石は、その年の十二月の末から、翌明治四十五年の四月の末へかけて、『彼岸過迄』を書き上げた。

明治四十五年四月二十七日、即ち『彼岸過迄』を書き上げた翌翌日、漱石は野上豊一郎に宛てて、「御入院中は生憎小説に追はれしげく御見舞も出来かね残念に候 此二三週間は又胃に酸が出て運動すると形勢不穩故成るべく靜養の工夫致し候 夫に神経もよろしからず閉口致し候。

けれども根が呑氣な生分故まあどうかなるだらうと存居候。然し大兄の方は漫性的のものでなき故成るべく一時に癒して置く事必用に候出来る丈轉地でも何でもしてゆつくり損失を取返す御工面可然と存候老生如きは損をすれば損のし損まことに心細く候」と書いた。同じ年の七月二十五日野間眞綱に宛てた手紙の中にも、「小生も不相變消光たゞ病後は前と違ひ少々烈敷活動するとすぐ胃部に故障を生じやすく夫が爲め本年大阪社にて催ふしの講演も斷はり申候」と書いてある。同じ年（大正元年）八月十二日の森成麟造に宛てた手紙の中にも、「何うも少し活動すると宜しくありません何だかも長くはないやうな氣がします」と書いてある。中村是公と一緒に鹽原・日光・輕井澤・上林とあるいて歸つて來た翌日、九月一日大谷繞石に宛てた手紙の中には、「からだが悪いと人並の活動も出来かねつれにも心配をかけ甚だ膺甲斐なき事のみ候」とあり、十一月九日皆川正禧宛の手紙の中には、「大病後どうしてもからだが丈夫にならないやゝともするとやりそこなふ是では長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癡人のやうなものである。」とある。

さうかうしてゐるうちに、三度目の潰瘍が來た。漱石は大正二年の四月の初めから五月の終りへかけて、二ヶ月近く床にいた。漱石が初めて外出したのは、五月二十八日の事である。五月二十日に漱石は沼波武夫に宛てて、「病氣をする度に職業がへを勸むる人必ず出て參り候小生も



病氣程不面目のものなき様相成候へども依然病氣にかゝり申候御憫笑被下べく候」と書き、同じ五月三十日には松山忠二郎に宛てて、「軸物の御注文にはちと避<sup>原</sup>易致候實以ての惡筆折角頼まれれば耻曝しを覺悟の上にて依頼者の芳志を空うせざる事をつとむる丈の事に候若し御入用とあれば何枚にても書き可申然し御承知の通りの病軀いつ死ぬか分らぬ故全くの處記念と覺召被下度候。だから若し生きて居れば今にうまくなつた時書き直さうといふ山氣あり従つて表装は御無用に候」と書いてゐる。五月三十一日笹川臨風宛の手紙には、「小生其後順當に快方に向ひ昨今は又人間の群に伍する次第とうぞ御喜び被下度候」とあり、六月二日森圓月宛の手紙には、「却説病氣の方は御蔭を以て又々人間世界に暫時立ち還る事と相成候先づ尋常人に近き行動をとる事を心掛居候間乍憚御安心被下度候」とある。是を明治四十三年十一月九日、漱石が胃腸病院からドイツにゐる寺田寅彦に宛てて書いた、「まづ當分は死にさうもない、喜んで呉れ玉へ。」に比べて、此所の喜びの奥に、いかに淋しい暗い影が漂つてゐるか。殊に「いつ死ぬか分らない」とか、「死にかゝつては生き還つて」ゐる自分とか、「どうかかうか露命をつないでゐるとか、いかにも心細い言葉が、この年のこの病氣以後、當分の間、漱石の書簡の間を縫うて、絶えずちらつき出すといふ事實を考へ合せて見ても、この大正二年の三度目の潰瘍が、漱石の心にかに深刻な「ひゞ」を残したかは、何人にも想像するに難くないであらう。

『行人』の一郎は、「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。」と言つた。また人間は「是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」とも言つてゐる。自分は、幾度も「死にかゝつては生き還つて」、「どうかかうか露命をつないでゐる人間である、自分は「いつ死ぬか分らない」といふ事が、一人の人間の眼の前に、どうにも身の躲しやうのない事實として、リアルに現前する時、その人は、必至にその問題と對決し、その問題を乗り超え、「是非共生死を超越」する仕事に、自分の全力を傾倒しようとするに違ひない事は、言ふまでもない事である。果して漱石がその問題を問題としたものかどうかは、確實には分からない。然し漱石は大正二年七月十八日中村翁に宛てて、「からについての御手紙拜見致候實は先達より何人も没交渉にてしかも小生には大いに必要な事のために頭を使ひ居り夫がため人のためには一切何事をなすの勇氣も餘裕も無之「から」の事も存じながらつい其儘に相成居候。行人の原稿などは人の事にあらず自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べきを矢張まだ書き終らざるにてもしか御承知願上度候勿論社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共必要に候。それに何とか區切をつけぬうちには中々カラ處の騒でなく全く不人情な話ながらカラ杯はどうでもよく（小生には）相成居候。貴兄よりは怪



しからぬ次第なれど小生には當然の事と覺召し被下度候」と書いてゐる。然し「社會とも家族とも誰とも直接には關係」のない事で、然も「それにか區切をつけぬうちは」「自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べき」「行人」の續稿にさへ手をつける事が出来ないといふほどの大問題が、「是非共生死を超越」しようとする問題を措いて、漱石に外にさう澤山あらうとも思はれない。殊に漱石はその後、既に『行人』の解説でも觸れたやうに、或は「啓始めて確信し得た全實在は頂戴した其日に讀みました……あゝいふ方面の事はだれも考へてゐません、所があゝいふ方面の事は窮所迄行くとは是非共必要になつて來ます 人の事ではないみんな自分の頭の上の事です 私をあゝいふ意味の事で切實な必要を感じつゝいまだ未程<sup>?</sup>の地に迷つてゐます どうかしなくてはならないがどうもなりません 平生斯うだと思ひ詰めた事もいざとなるとがらりと顛覆します、全く定力が足りないからだと思ひます」(九・一・沼波武夫宛)と言ひ、或は「私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありませぬ、冷淡で道に入れるものはありません」(一〇・五・和辻哲郎宛)と言ひ、或は『行人』の一郎をして、「僕は明かに絶對の境地を認めてゐる。然し僕の世界觀が明かになればなる程、絶對は僕と離れて仕舞ふ。」と言はしめ、且つ「聰明靈利に生れ付いた」、然もその「聰明靈利が悟道の邪魔になつて、何時迄経つても道に入れなかつた」香巖が、瀧山の許で「善も投げ惡も投げ、

父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し盡して」、最後に「一撃に所知を亡」つて悟を開いた事を羨ましがらせてゐるのも、すべて漱石の目ざしてゐる方向が、この一點に繋がつてゐる事を、物語つてゐないものはないと言つて可い。漱石が、「何とか區切をつけぬうち」は、外の事は「一切何事をなすの勇氣も餘裕も」ないといふほど、打ち込んで取つ組み合つた問題は、この問題に違ひないと思ふ。

『行人』の一郎が、「絶對」の境地に這入りたがつた事の——「是非共生死を超越」したがつた事の——根本動因を形づくるものは、言ふまでもなく、自分の妻のお直の愛に對する不信である。一郎は自分に對するお直の愛を、信じたいのである。然しお直はそれを信じさせてくれないのである。もしくは一郎がそれを信じる事が出来ないのである。——漱石の中には是と同じ問題が、大問題となつてゐた事は、争はれない。それだからこそ漱石は、思ひ切つて『行人』を書く氣にもなつたのである。然し漱石がその間に潰瘍で倒れ、平癒した後それを書き続けなければならぬ場合に置かれたにも拘はらず、なほそれに手をつける事が出来なかつたほど、漱石に「區切をつけ」る事を迫るものがあつたとすれば、それが「お直」の愛に對する不信の問題を超えて、もつと重大なもの、もしくは「お直」の愛に對する不信の問題の奥に潛む、もつと根本的な問題でな



ければならなかつた事は、言ふまでもない事である。『行人』のHさんが一郎を評したやうに、漱石には「美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎ」、「甲でも乙でも構はないといふ鈍な所が」なく、相手は「必ず甲か乙かの何方かなくては承知出来ない」のみならず、その「甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、びたりと」自分の「思ふ坪に嵌らなければ肯が」はない、潔癖があつた。漱石は「自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の様に際どい線の上を」自分でちやんと「渡つて生活の歩を進めて行く」く代りに、「相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで来て呉れなければ我慢」が出来ないのである。勿論それはHさんの言ふ通り、「兄さんの豫期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遙に進んだもので」あつたに相違なく、従つて一郎が「美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌む」のも當然の事ではあつたが、然しそれだけに一郎が——従つてはまた漱石が、自身を孤獨に感じなければならなかつた事も、亦已むを得ない事であつた。「お直」が漱石を理解しなかつた事は、言ふまでもない。多くの弟子達も亦、漱石を理解しなかつた。社會も亦、漱石を理解しなかつた。漱石は、自分を理解する事のない周圍に、寧ろ賑やかに取り圍まれて、唯一人の道を、毅然として唯一人あるいて行く。この事は既に『行人』の解説に引用した『續書簡集』中の書簡第一三三一號・第一三六五號・第一三七二號・第一四一六號によつても明白に證明

されてゐると言つて可いであらう。さうしてこの孤獨感こそ漱石をして『行人』をコンソールヴせしめ、それを一郎とお直との夫婦間の愛の葛藤にまで結晶せしめ、それに「何とか區切をつけ」しめようとしたものに外ならないのである。『行人』のお直は勿論漱石のコンクリートなインディビデュアルな體驗から來たものに相違なかつたが、それと同時にそれは亦、漱石をしてさういふ孤獨感に陥らしめたものの一切の、象徴でもあつた。さうしてその「お直」を完全に乗り越す爲にも、漱石は「生死を超越」する事を必要としたのである。

『心』の先生は、先生に慕ひ寄り、とかく先生の懷に飛び込まうとする私に對して、「あなたは熱に浮かされてゐるのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたから夫程に思はれるのを、苦しく感じてゐます。然し是から先の貴方に起るべき變化を豫想して見ると、猶苦しくなります」と言つてゐる。私が、自分はそれほど先生から信用されてゐないのかと反問すると、先生は、「信用しないつて、特にあなたを信用しないんぢやない。人間全體を信用しないんです」と答へ、「ぢや奥さんも信用なさらないんですか」と訊かれて、更に「私は私自身さへ信用してゐないので。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないので」と答へる。さうして先生は、「兎に角あまり私を信用し



ては不可ませんよ。今に後悔するから。さうして自分が欺むかれた返報に、残酷な復讐をするやうになるものだから」と付け加へ、それを説明して、「かつては其人の膝の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥ぞけたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未來の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と獨立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」と言つてゐる。是は勿論『心』の先生の過去の閱歴が人生をしか觀ぜしめた結果、私に對してしか言はしめたものには相違ないが、然しその奥に、漱石がその實際生活に於いて、しか感じしか言はなければならぬものを經驗させられて來た事實が潜んでゐるといふ事を見遁がす譯に行かない。換言すれば、明治三十七八年の頃、あれほど純真な心持で漱石の周圍に群がりつどつた弟子達のある者は、狎れや無節度や生意氣や無神經によつて、到頭漱石にかういふ言葉を吐かせるに至つたに違ひないのである。明治四十四年十月二十五日小宮豊隆に宛てて漱石は、「原稿を歸して呉れといふ端書は拜見したが、二十四日には社へ出る必要があるので夫迄でいゝと思つて返事を上げなかつた。／所で今度ある意味から森田にやめて貰はなければならぬ事になつた。森田が居なくなれば文藝欄の編輯者の問題が出る譯だが、僕は少し思ふ處があつて文藝欄を廢止する相談を『編輯部』の人として仕舞つた。今迄は色

々御世話になり又是迄骨を折つたものを放棄するのは惜しいものであるが、社全體の紙面の改良や原稿の選擇に就いて僕が何か無遠慮の事を云はうとすると、どうしても僕が先づ是丈の犠牲を拂つて置かなければならない。文藝欄を維持する積なら維持はいくらでも出来る、又改良も出来る。然しさうすると他人の領分へは口を出し悪くなる。僕は今度池邊君が退社したに就て或は自分も出やうかと考へたが残る人々から事狀を聞いて見るとさう意地を通す必要もないから居る事にした。のみならず自分の直轄してゐる文藝欄の棒を永久流して仕舞つた。是は僕が猶將來に朝日をより好くし得る見込を抱いた爲であつて、決して自分の地位を安固にするため他人の云ふ通りになつたのではない。夫は君にどう思はれても構はないが、向後到底僕の發見し得る「朝日」の點々に於て改善の身込が立たないとなつたら、多分僕はやめるだらうと思ふ。／夫からも一つは文藝欄は君等の氣焰の吐き場所になつてゐたが、君等もあんなものを斷片的に書いて大いに得意になつて、朝日新聞は自分の御蔭で出來てゐる杯と思ひ上る様な事が出來たら夫こそ若い人を毒する悪い欄である。君杯にそんな見はあるまいが、近來君の行爲やら述作に徴して見ると僕は何だか心細くなる様な點もある。あれで好いつもりで發展したらどうなるだらうと云ふ氣が始終つけまづはつてゐる。要するに朝日文藝欄杯があつて、其連中が寄り合つて互に警醒する事はせず互に挑撥し會ふのも少しは毒になつてゐるだらうと考へる。それで文藝欄なんて少しで



も君等に文藝上の得意場らしい所をぶつつぶしてしまつた方が或は一時的君や森田の藥になるかも知れない。／僕は向後文藝上の事に關して君等の援助を仰がなければならぬ場合が澤山あるだらうと思ふ。現に援助を仰ぎつゝあるのに、こんな事を云ふのは甚だ失禮でもあり諸君も氣を悪くするかも知れないが實際昨今の僕はさう感ずるより外に仕方がないのだから、原漱石は本當にしか感じてゐるのだと思つてくれ給へ。さうし「て」笑ふとも怒るともして呉れ玉へ。／玉稿は同封で歸す。あの端書の書き方杯を兎角申すのは何だか小八釜しい様だが「闇から闇へ」杯いふ文學的形容詞は用ひない方が穩當であらう。殊に「夫は堪へられない」に至つては讀む方では一種厭な感じがする。自分の書いたものが自分の豫期した時間内に新聞に出ないのは不愉快には違ない。又其原稿がどうなつたか分らないのも不平には違あるまい。けれども夫に堪へられないといふのは自分の書いたものが左も／＼重大な論文で、夫を掲載しない新聞が左も／＼不徳義で、之を草した自分は左も／＼大家である様に讀まれる。以上の諸條項を備へないで猶且つ下らない事に堪へるとか堪へられないとかいふのは一種のセンチメンタリストか或は片寄つた文壇の流行語を故意に使用するコンエンションナリストである。／僕の近來の君に注意したい點は道徳的にも藝術的にも此手紙のうちに含まれてゐると思ふから、とくにそれを長く説明したのである。／原稿は五回分丈社に回つてゐた。僕は自分から請求して、悉くそれを持ち歸つた。理窟から云へば

掲載の有無に拘はらず原稿料を拂はなければならぬ。が僕は君等が單に原稿料をとる爲にのみ書いてゐると思はれるのが厭だから、わざ「と」請求しないのである。」と書いてゐる。また大正二年十一月二十五日同じ小宮豊隆に宛てては、「君の手紙は全然勘ちがひです。手紙の中に「です」とか「ません」とかいふ敬語を使ふのはあまりぞんざいに書きたくないからです。候文は習慣上さう思はないか知れないが實は大變鄭寧なものです。候文には抗議をしないで「です」や「しません」に對して他人取扱と思ふのは誤つてゐます。日常の言語で手紙をかくのはどうもあまりひどい感じを他に起させやしないかといふ氣が起つてから私は何人に對してもあゝいふ語尾を多く使ふやうになりました。私は自分の小供には日常の言語ですら改つて斯うなさい、あゝなさいとさへ云ひます。談話より一段改つた手紙にあの語尾は禮として相應のものだらうと思ふ。／僕は偶像でないから君等が批評は何とも思はないそんな事を心配して一日も暮せるものぢやない。ヂスイリユ<sup>原</sup>ジョンとか人と人との隔りとかいふ哲學は別問題であり又人間に普遍的な問題だから何も手紙に就てのみ云々する必要はあるまいと思つて其方は云ひません。さういふ事を手紙の書きぶりから出立して云々するのは馬鹿々々しいのです。僕にも色々わるい所があるが、君は時々今いつたやうな馬鹿々々しい所を露出する男のやうに思はれます。」と書いてゐる。「行人」の一郎は、「僕はもう大抵なものを失つてゐる。纔に自己の所有として残つてゐる此肉體さ



へ、(此手や足さへ)遠慮なく僕を裏切る位だから」と言つてゐるが、この一郎の言葉の奥には、妻を失ひ、弟子を失ひ、讀者を失ひ、更に自分自身の健康をも失つたと感じてゐる漱石の、底ぬけの淋しさが封じ籠められてゐるのである。

然しさういふ底ぬけの淋しさの中になつて、漱石はたゞろがなかつた。漱石は、それら一切のものを失つたと感じてゐるが、その失つたものの奥に新しい世界を作り上げ、その世界の中に住む事によつて、雄雄しく自分の淋しさを突き抜けようとした。それが漱石の「道」であつた。のみならず漱石は、『行人』のHさんが、「私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡して、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間斷なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絶対に物から所有される事、即ち絶対に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落付けるのでせう。」と言つたやうに、積極的にこの問題を取り越す爲の修行として、「道」に入らうと心ざすとともに、或は自然の美しさを難有く尊とく感じる事によつて、或は自分で書をかき畫をかく事によつて、或は

他人の書や畫を鑑賞する事によつて、「絶対に物から所有され」つつ「絶対に物を所有」して心の「落付」きを取り復す工夫をした。

漱石が畫をかき始めたのは、明治三十六七年の頃である。もつとも是は水彩畫で、それは漱石の創作欲が旺盛に漲り出すとともに、次第に影を潜めたが、明治四十五年(大正元年)に至つて、今度は南畫的なものとなつて、それが漱石を動かし始める。五月二十八日漱石は戸川秋骨に「生れて始めて畫をか」いたと言つて、「最明寺殿が後向になつてあるいてゐる」畫を送つてゐるが、是はかういふ種類の畫をかういふ絹の上に「生れて始めて」かいたといふ意味で、畫一般をこの時「生れて始めて」かいたのだといふ意味でない事は、言ふまでもない。その後漱石は自發的に、ぼつりぼつりと畫をかき始めた。十一月十八日津田青楓宛の手紙に漱石は、「拜啓私は昨日三越へ行つて畫を見て來ました色々面白いのがあります。畫もあれほど小さくなると自身でもかいて見る氣になります。あなたのは一つ賣れてゐました。……今日縁側で水仙と小さな菊を丁寧にみました。私は出來榮の如何より畫いた事が愉快です。書いてしまへば今度は出來榮によつて樂みが増減します。私は今度の畫は破らずに置きました。此つぎ見て下さい。」と書いてゐる。十一月二十五日沼波武夫宛の手紙の中でも漱石は、「私も作ばかりに熱心になりたい又は勉強



したいのですが少々頭の具合やからだの具合であんなつまらない畫などをかきます。あなた丈なら御目にかける筈ではなかつたのですが野上君が畫をかいたためついあなたの前まで耻を曝しました。／時々御遊びに御出被下さい。私はもう小説をかゝなくてはならないので辟易して居ります」と書いてゐる。

然し漱石が更に打ち込んで畫をかくやうになつたのは、漱石が『行人』を書きさしたまま胃潰瘍に倒れてから以後の事である。既に大正二年五月三十日林原耕三宛の手紙の中で、漱石は「……度々御手紙をいたゞきまだ一返も返事を出さず甚だ無申譯候實は少々畫に凝つて他事を閑却遂に失敬尤も碌な畫はかゝず只凝る丈也」と言つてゐる。六月二日野村傳四宛の手紙の中にも、「近頃は病後恣に閑を貪つて畫ばかりかいてゐる」と書いてある。六月十一日津田青楓宛の手紙の中には、「私はもう畫を切り上げやう／＼と思ひながらま「だ」書いてゐます今度來たら又見て忠告をして下さい此間色々いつて貰つたので大變利益を得ました。といふと畫がかかるやうで可笑しいですが、近頃は中々かけますよ三日に一つ位傑作を拵えては一人で眺めてゐます、水彩畫展覽會の方も見ました。小杉未醒のスケッチが面白い御座いました。どの畫を見ても下手な自分と比較すると偉大ですどうして日本にこんな奇麗な畫をかく人が澤山あるかと驚きます」と書いてある。同じ月の十八日同じ津田青楓宛の手紙には、「小川千甕先生の畫を御送り被下難有候どうも

旨いすねだれの畫を見ても感心の外なくカツ存外な思ひも寄らない所をかきます 斯うなるとあらゆるものに感服し敬服し歡喜する事が出来て甚だ愉快です 私はあれから二三枚妙なものを畫きました其うち一二枚「は」必ず賞められなければ承知の出来ないものでいつか序の時又見て下さい」とある。

然し同じ年七月二日津田青楓宛の手紙に、「畫は二三日前からやめました。あまりすさむと外の事が出来ないと思つて紙の盡きたのを好機として切り上りました」と書いてある所をもつて見ると、漱石は六月の末には既に畫をかく事を一時斷念してゐるのである。是は或は「實は先達より何人にも没交渉にてしかも小生には大いに必要な事のために頭を使ひ居り夫がため人のためには一切何事をなすの勇氣も餘裕も無之」とある、七月十八日の漱石の手紙の内容と、何等かの點で多少の關係があるのではないかとも思はれる。それは無論想像に過ぎないとしても、その七月二十日に漱石は同じ津田青楓に宛てて、「油繪の繪具を買ふ事が出来ます。いつか一所に行つて買つて下さいませんか。油繪をかいで見やうといふ心持はまだ起らないのですから決して急ぐ必要はないのですからあなたのいつでも氣の向いた時で結構であります。」と書いて居り、七月二十六日には再び津田青楓に宛てて、「拜啓先達中より繪の具などの事にて種々御配慮を煩はし恐縮の至に候……／此間の撫子は大に手を加へ候夫から紫陽花を一枚描き候今日も何かと思ひ候へども何う



も描く材料なく御やめに致候」と書いてゐるのだから、少くとも漱石の問題は、既に七月の二十日前後には一往の「區切」がつき、漱石は二十日以後あまり時日のたたないうちに、既に油畫の具を買ひ込んで、油畫の稽古を始めたと思像しても差支なさうに思はれる。ただ油畫は漱石には、性に合はなかつたと見えて、あまり長くは續かなかつた。恐らく大正二年一杯は續かなかつたのではないかと思ふ。漱石がその後、死ぬまでかき續けたものは南畫である。大正二年十月八日、即ち『行人』の續稿が新聞に掲了になつてから凡そ三週間の後、漱石が野上豊一郎に宛てて、「先達ては難有う私は別に岡田さんに禮状を出さないから君から宜しく願ひます……高芙蓉の畫を見てから僕も一枚かいたがどうもうまく行かない生涯に一枚でいゝから有がたい感じのする繪が描きたい山水動物花鳥何でも構はないありがたいので人が頭を下げるやうな崇高の氣分を持つたものをかいて死にたい。」と書いてゐるのも、それが油畫でなくて南畫であつた事は、言ふまでもない事である。然もその際漱石は、大正二年十一月三十日門間春雄宛の手紙の中で言つてゐるやうに、「私の畫といふよりも寧ろ子供のいたづら見たやうなものです。その小供の無慾さと天真が出れば甚だうれいのですがたゞ小ぎたない所丈が小供で厭味は大人らしいから困ります。書でも畫でもかきなれないと一通りのものは出來ず。又書きなれると黒人くさくなつて厭なものです。従つてどうして好いか解」らない氣持にもなるのである。

『行人』の一郎は、「斯うして髭を生やしたり、洋服を着たり、シガーを銜へたりする所を上部から見ると、如何にも一人前の紳士らしいが、實際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろ／＼してゐる。二六時中不安に追ひ懸けられてゐる。情ない程落付けない。仕舞には世の中で自分程修養の出來てゐない氣の毒な人間はあるまいと思ふ。さういふ時に、電車の中やなにかで、不圖眼を上げて向ふ側を見ると、如何にも苦のなさうな顔に出つ食はず事がある。自分の眼が、ひとたび其邪念の萌さないぼかんとした顔に注ぐ瞬間に、僕はしみ／＼嬉しいといふ刺戟を總身に受ける。僕の心は早敷に枯れかゝつた稻の穂が膏雨を得たやうに蘇へる。同時に其顔——何も考へてゐない、全く落付き拂つた其顔が、大變氣高く見える。眼が下つてゐても、鼻が低くつても、雜作は何うあらうとも、非常に氣高く見える。僕は殆んど宗教心に近い敬虔の念をもつて、其顔の前に跪づいて感謝の意を表したくなる。自然に對する僕の態度も全く同じ事だ。昔のやうに唯うつくしいから玩ぶといふ心持は、今の僕には起る餘裕がない」と言つてゐる。また一郎は別の所で、「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」と言ひ、「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」と言つてゐる。



漱石は『彼岸過迄』の中で、「一筆がきの朝貌」のやうな女中の作を點綴して、須永に「尊とい感じを起」さしめた。『行人』では、「宅中うちなかで一番慾の寡ない善良な」お貞さんとお貞さんをそのまま男にしたやうなHさんとを點綴して、沸きたぎる一郎の頭の中に清爽の氣を吹き込んだ。然もそのHさんから、「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」と訊かれて、一郎は、「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」と答へた。一郎に従へば、「嫁に行く前のお貞さんと嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の爲にスポイルされて仕舞つてゐる」「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪よしまになるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやない……」、従つて一郎はお直を離別しようとする前に、もしくはお貞さんと一緒にならうとする前に、まづそれらの相手によつて「幸福を求める」希望を捨てようとするのである。もしくは「スポイルされ」た相手を憎む前に、寧ろ「スポイル」した自分を憎み、もしくは「スポイルされ」た相手を憫れまうとするのである。

人が、自分を正しいと信じて疑はない以上、さうして自分について來ない相手の方が間違つて

ゐると斷じて憚らない以上、自分を枉げる事なしにこの道を踏み出す事は、一人の人間の仕事として、決して生やさしい仕事ではなかつた。然し漱石は、敢然としてその道を踏み始めた。大正三年三月二十九日、『心』が新聞紙上に連載され出す凡そ三週間前、津田青楓に宛てて、「まだ修禪寺に御逗留ですか 私はあなたが居なくなつて淋しい氣がします面白い畫を澤山かいて來て見せて下さい金があつてからだが自由ならば私も繪の具箱をかついで修善寺へ出掛たいと思ひます 私は四月十日頃から又小説を書く筈です 私は馬鹿に生れたせゐか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行きます、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます……世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます……皿と鉢を買ひました。もつと色々なものを買ひたい。藝術品も天地と同じ樂みがあります」と書いた漱石は、その『心』で、自分の中に巢喰つてゐる——従つて一般人の中に巢喰つてゐる最も醜い私——嫉妬の姿を、精刻に描き出した。同時にその私の爲に終生の十字架を背負はされた者の、崇高な贖ひの生活を描き出した。「世の中にすきな人」が「段々なくな」つて行き、「天と地と草と木が美しく見え」、皿と鉢といふやうな「藝術品も天地と同じ樂み」を自分に與へてくれるものだと感じ、「春の光」を「たより



に生きてゐるのだと言つてゐる漱石は、自分の中に天と私とを持つてゐる事を認識し、自分の中の天によつて自分の中の私を征服し、少くとも自分だけは、「光風霽月」のやうな、もしくは「青天白日」のやうな世界の持主として、「下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行き」「丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ」「厭な性分」から、出来るだけ早く脱却したいと思ふのである。

然も自分の中の私を征服し脱却するといふ事は、やがて一郎の所謂「生死を超越」する事であり、また一郎の所謂「絶對」の境地を獲得するといふ事であつた。明治四十年十一月に書かれた『鶏頭』序の中で、禪味といふものを解釋して、漱石はかう言つてゐる。——「禪坊主の書いた法語とか語録とか云ふものを見ると魚が木に登つたり牛が水底をあるいたり怪しからん事許りであるうちに、一貫して斯ふ云ふ事がある。着衣喫飯の主人公たる我は何物ぞと考へて煎じ詰めてくると、仕舞には、自分と世界との障壁がなくなつて天地が一枚で出来た様な虚靈皎潔な心持になる。それでも構はず元來吾輩は何だと考へて行くと、もう絶體絶命につきもさつちも行かなくなる、其所を無理にぐいぐい考へると突然と爆發して自分が判然と分る。分るとかうなる。自分は元來生れたのでもなかつた。又死ぬものでもなかつた。増しもせぬ、減りもせぬ何んだか

譯の分らないものだ。／＼しばらく彼等の云ふ事を事實として見ると、所謂生死の現象は夢の様なものである。生きて居たとて夢である。死んだとて夢である。生死とも夢である以上は生死界中に起る問題は如何に重要な問題でも如何に痛切な問題でも夢の様な問題で、夢の様な問題以上には登らぬ譯である。従つて生死界中にあつて最も意味の深い、最も第一義なる問題は悉く其光輝を失つてくる。殺されても怖くなくなる。金を貰つても難有くなくなる。辱しめられても恥とは思はなくなる。と云ふものは凡て是等の現象界の奥に自己の本體はあつて、此流俗と浮沈するのは徹底に浮沈するのではない。しばらく冗談半分に浮沈して居るのである。いくら猛烈に怒つても、いくらひい／＼泣いても、怒りが行き留りではない、涙が突き當りではない。奥にちゃんと立ち退き場がある。いざとなれば此立退場へいつでも歸られる。しかも此立退場は不増である、不減である。いくら天下様の御威光でも手のつけ様のない安全な立退場である。此立退場を有つて居る人の喜怒哀樂と、有たない人の喜怒哀樂とは人から見たら一樣かも知れないが之を起す人之を受ける人から云ふと莫大な相違がある。従つて流俗で云ふ第一義の問題も此見地に住する人から云ふと第二義以下に墮ちて仕舞ふ。従がつて我等から云つてセツパ詰つた問題も此人等から云ふと餘裕のある問題になる。——勿論是は漱石が、まだ死に直面しない時分に考へた禪味の辯である。然し漱石が死に直面したしなかつたに拘はらず、是が凡その方向に於いて、『行人』の



一郎が求めてゐた所のものと、殆んど同じものであるといふ事は、恐らく誰の眼にも明らかであるに違ひない。一郎の所謂「絶対」は此所の所謂「立退場」である。さうしてこの「立退場」の獲得こそは、一郎の所謂「生死を超越」する事によつてのみ可能になる筈のものでつたのである。

大正三年十一月十四日、漱石は林原耕三に宛てて、「拜復 私が生より死を擇ぶといふのを二度もつゞけて聞かせる積ではなかつたけれどもつい時の拍子であんな事を云つたのです然しそれは嘘でも笑談でもない死んだら皆に柩の前で萬歳を唱へてもらひたいと本當に思つてゐる、私は意識が生かすべてであると考えるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分「は」ある、しかも本來の自分には死んで始めて還れるのだと考えてゐる 私は今の所自殺を好まない恐らく生きる文生きてゐるだらうさうして其生きてゐるうちは普通の人間の如く私の持つて生れた弱點を發揮するだらうと思ふ、私は夫が生だと考へるからである 私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない 夫から私の死を擇ぶのは悲觀ではない厭世觀なのである 悲觀と厭世の區別は君にも御分りの事と思ふ。」と言つてゐるのである。少くとも思想的には漱石は、この時既に「死を人間の歸着する最も幸福な状態」として、——いくら拂つても拂つても拂ひきれない私だらけの人間を罷めて、自分がそれに則らうとした天に

歸る事の出来る契機として、—— 歡迎しようとするやうな氣持になる事が出来てゐた事だけは、慥かである。思ひなしかも知れないが、この後の漱石は人人に、あまり自分の健康の事を、とやかく愚癡めかして、報告してやつてゐないやうに思はれる。あつてもそれは、「あなたの病氣は如何ですか随分御注意をなさいまし私は死につゝさうして生きつつあります」(三・一一・一〇・渡邊和太郎宛)とか、「胃の方は宿痾だから癒らんけれども今はまあ無事に済んでゐます」(四・一・二〇・鬼村元成宛)とか、「私は若い人が死ぬのを甚だ悲しく考へては自分の生きてゐるのが濟まないと思ふ事もあるのです」(四・二・一三・門間春雄宛)とか、「私はあなたよりいくつ年上か知りませんがあなたが立派な師家になられた時あなたの提唱を聴く迄生きてゐたいと願つてゐます其時もし死んでゐたらどうぞ私の墓の前で御經でも上げて下さい又間に合つたら葬式の時來て引導を渡して下さい私に宗旨はありませんが私に好意をもつてくれる偉い坊さんの讀經が一番ありがたいと考へます」(四・四・二二・富澤敬道宛)とか、「拜復いつも御無沙汰をしておます近頃講演は殆んど遣らぬ事に自然なつて仕舞ました是は小生の無精と時間のないのと夫を知つて頼む人が來なくなつたからです先年も謝絶今度も御斷りでは甚だ濟みませんが右の譯で中々遠方へ出掛ける勇氣も餘裕も時間も根もありませんからどうぞ御勘辨を願ひます小生は旅行をするといつても病氣をします今春も京都へ行つて寝ましたまあ癡人の部に屬すべき人間です」



(四・九・三〇・菊池謙二郎宛)とか、寧ろ明るい感じのものが多いやうである。同じ「癡人」といふ言葉を用ひるにしても、此所の「癡人」の奥には、大正元年十一月九日皆川正禧宛の手紙の中の「癡人」のやうな、デスペレートな苦いものが含まれてゐない。少くとも此所の「癡人」といふ言葉を使ふ漱石の心持は、透き通つて、客觀的になつてゐる。

大正四年六月十五日、漱石が『道草』を新聞紙上に連載し出してから十三日目、武者小路實篤に宛てて、漱石は「私もあなたと同じ性格があるので、こんな事によく氣を悩ませたり氣を腐らせたりしました。然しこんな事はいつ迄経つても續々出て來て際限がないので、近頃は出来る丈これらに超越する工夫をして居ります。私は随分人から悪口やら誹謗を受けました。然し私は黙然としてゐました。猫を書いた時多くの人は翻案か、又は方々から盗んだものを並べたてたのだと解釋しました。そんな主意を發表したのさへあります。／武者小路さん。氣に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く澤山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。／私は年に合せて氣の若い方ですが、近來漸くそつちの方角に足を向け出しました。時勢は私よりも先に立つてゐます。あなたがそちらへ眼をつけるや

うになるのは今の私よりもずつと若い時分の事だらうと信じます。」と書いてゐる。『行人』の一郎が最後に到達した地點は、『心』の先生を通過して、現在『道草』を取り扱つてゐる、漱石のこの地點まで發展した。死が「人間の歸着する最も幸福な状態」であると觀じる事によつて、目睫に迫る死の影から脅かされる事なくなつた漱石は、自分をはつきりした道理の世界に立てながら、道理に外づれて動く世界を、「それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派な」事であると考へようとする。換言すれば漱石は、人を憎むよりも前に、人を憫まうとする。明治二十四年、二十五の年、漱石が子規に宛てて、「僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ様世に立つには世を容るゝの量あるか世に容られるの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどもどうかこうか食ふ位の才はあるなりどうかこうか食ふの才を頼んで此浮世にあるは説明すべからざる一道の愛氣隠々として或人と我とを結び付けるが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に増加するの見込あり此増加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ」と書いてゐる事は、既に『書簡集』の解説でも指摘したが、漱石の厭世主義とその厭世主義を背景に持つ慈憐主義とは、凡そ二十五年を隔てて、かういふ内容のものになつて來るのである。——漱石は只管に人間を愛した。さうして漱石は、人間を愛したが故に、悩んだ。悩む



とともに、人間を憎まざるを得なかつた。然し憎んでも尙憎み徹す事が出来ないほど、人間を愛せずにはゐられなかつた漱石は、その人間を「ゆるす事」によつて、その人間を愛し続けようとするのである。もし自分が人間を「ゆるす事」が出来ないならば、「ゆるす事」によつて人間を引き上げる事が出来ないならば、それは寧ろ自分の愛が——自分の修行が足りないせゐであると考へて、一層「道」に深入りしようとするのである。大正四年四月十九日漱石が鬼村元成に宛てた手紙の中には、「私は禪學者ではありませんが法語類（ことに假名法語類）は少し讀みました然し道に入る事は出来ませんただの凡夫で恐縮してゐます」といふ、一節がある。大正五年十一月十日、既に『明暗』が紙上に連載されて第六十回に近づかうとしてゐるとき、漱石は同じ鬼村元成に宛てて、「私は私相應に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積です。氣がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥ともに虚偽で充ち／＼てゐます。耻づかしい事です。此次御目にかゝる時にはもう少し偉い人間になつてゐたいと思ひます。あなたは二十二私は五十七歳は二十七程違ひます。然し定力とか道力とかいふものは坐つてゐる丈にあなたの方が澤山あります。」と書いてゐる。越えて五日、十一月十五日に漱石は富澤敬道に宛てて、「變な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志ざす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大變な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の

専門家ですが矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから五十迄愚圖々々してゐた私よりどんなに幸福か知れません、又何んなに特勝原な心掛分かりません。私は貴方方の奇特な心得を深く禮拜してゐます。あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊とい人達です。是も境遇から來るには相違ありませんが、私をもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へると實に自分の至らない所が情なくなります。」と書いてゐる。漱石が自分で「自分の至らない所が情な」と思へば思ふほど、漱石の愛は無限に深まり、漱石の世界は無限に高まつて行つた。漱石が自分のモットーとして、夢寐の間にさへ忘れる事のなかつた「則天去私」の世界を、完全に獲得出来る日は、漸くにして漱石に近づいたやうに見える。然も漱石は四度目の潰瘍で倒れ、竟に再び起つ事が出来なくなつてしまふのである。

昭和十二年一月二十三日

小宮 豊 隆



昭和十二年二月五日印刷  
昭和十二年二月十日發行

漱石全集第十七卷

(大森製本)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
精興社













